

リリカル世界に魔王さ
ま進出

エビノカラアゲンまいはー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転スラのクロスオーバー流行つてほしくて気づいたら書いてました。
リムル様がリリカル世界で色々はつちやけるお話です。

C a u t i o n !

原作リムル様の「異世界になるべく干渉しない」という方針を無かつた事にしてま
す

- ・キャラ改変、捏造設定などがあります
- ・Web版転スラ読了済推奨です

・リリカル世界について詳しくない部分が多くあるので、違和感あつたらごめんなさい

1

次

1話

From:『時の庭園』

「言つたでしよう……？私はあなたが大嫌いだつて……」

何もない虚無が、そこに広がつていた。

『虚数空間』

全てを飲み込み、無力化する闇に彼女は眠る愛娘と共に身を投げ出す。

「母さんっ！」

次元の狭間に存在する『時の庭園』でロストロギア『ジユエルシード』を暴走させた
プレシア・テスタークサは、もう一人の娘の声を背に目を閉じた。

その口元に、微かな笑みを浮かべて……

また、どんなところに出くわしたな

不意に、透き通るような声が聞こえる。

既に病と度重なる戦闘で限界だつたプレシアは、その声の出所を確認する事も出来ず
に意識を手放した。

「母さんっ！ 母さんっ……!!」

少女と少年に抑えられているフェイエイト・テスター・ロッサは、その身を乗り出すようにして自らの生みの親に叫び続けていた。

たとえ、生まれてから今まで虐げられていても……

たとえ、優しかった大切な思い出が自分のものではなかつたとしても……

フェイエイトは、母が消えるのが嫌だつた。

涙を流し、声をあげて手を伸ばすが母との距離はあまりにも遠い。

全身から力が抜けた。

もう、どうしようとわかつてしまつたからだ。

「あまり時間はない！ 急いで脱出するぞ！」

時の庭園の崩壊が進んで行くのに対しても少年が響く。

フェイエイトは少女——高町なのはに手を引かれ、時の庭園を後にして。

—————

From : 『時の庭園』の近く。虚数空間

「また、とんでもないところに出くわしたな」

俺こと『リムル・テンペスト』は『異世界への門』^{ディファントゲート}という、異世界へと行き来できる魔法を使い、新たな冒険を求めて新世界にやつて来た。

やつて来た、のだが……

「これ、いわゆる次元の狭間って奴か？こんなところに放り出されるなんて初めてかもな」

俺の『胃袋』の中とほぼ同じ性質の虚数空間。

今まで色んな物を取り込んできたが、俺自身中に入るのは初めてだ。

周囲を見渡すと遠くに浮遊している建造物が見つかったが、明らかに現在進行形で崩壊している。

そして俺の近くには、なぜか眠っている女性とその娘らしき女の子の死体が漂っていた。

（ほんと、どういう状況だ？これ）

正直色々と意味不明だったが、この親子を放つておくのも目覚めが悪い。

俺はひとまず、この親子を連れて崩壊中の建造物に近づくのだった。

／＼＼＼＼

建造物が崩壊している原因だが、周辺の空間を維持している力場が正常に作動していない事と、膨大なエネルギーの暴走という事が判明した。

ひとまずパパッと暴走しているエネルギーを俺の『胃袋』に収納し、空間維持の力場を俺自身が生成する事で対処する。

親子に対しては一旦家屋っぽい所の寝室らしき所に寝かせ、俺特製のフルポーションをかけてから死体の少女に蘇生魔法を行なつた。

死にそうちだつた女性と死んでいた女の子は、今ではスヤスヤと夢の中だ。

俺の解析結果でも、二人とも問題ない状態になつていてることがわかつている。一息ついた俺は、この建造物に興味が出て来たので散策することにした。

特に、この空間を維持している技術が興味深い。

解析でおおよその力場の中心地点を把握したので、そちらへ向かう。

「まあ、当然のように壊れるよな」

建造物内部の奥深く、力場の中心地であるそこは見事に荒れていた。

力場を形成していたであろう機関部は未だに内部から小規模の爆発を起こし、完全に崩壊する寸前といった所だ。

「エネルギーを力場の形成ではなく別の事に使おうとしたんだな。無理な形でエネルギーを引っ張り出そうとしたから暴走してる、と」

このまま放置して壊れても、俺自身で力場を生成しているから今は問題はないが……もちろん俺がこの場を離れば、この建造物は機能を停止して力場を失い完全に崩壊するだろう。

少しだけ見たこの建造物は、某天空の城を彷彿とさせる美しいものだつた。

あの映画のように、壊れていく姿を眺めるのも一興かもしれないが……正直無くなるのは惜しい。

この機関も直す事にした。

(そんじや頼むぜ、相棒!)

〈御心のままに、ご主人様〉

俺のスキルであり、自我を持つ相棒でもあるシエルが応える。

機関の構造、原理などは俺にはわからなかつたがシエルさんは把握済みらしい。呆気ないほどに、サクッと修理は完了したのであつた。

～～～～～

建造物の崩壊を止めた俺は、好奇心の赴くままに内部を探索しつつ修理していた。解析すると、随所に未知の技術が使われている事が判明したりして面白いのだ。

機械の動作には電気だけでなく、この世界特有の魔法などが使われているらしい。しかも、魔法は機械で制御されていた。

魔法を発動する際、演算を機械に任せてアプリケーションの要領で発動しているようだ。

「なるほどねえ…ドアの開閉とかにも魔法が使われてる所を見ると、この世界でも魔法は一般的に普及してるんだろうな」

少し見るだけでも、この建造物が非常に高度な魔法技術で動作していることがわかる。

気になつたので更に色々調査する事にした。

建造物内部の研究室らしき所を見つけ、データベースをハッキングする。（シリルさんがやつてくれた）

どうやら此処では死者蘇生について研究してたようだ。

もしかしたら、さつきの死体の女の子を蘇させようとしていたのかも知れない。

ちよつと軽率にやらかしたかとも思ったが、過ぎた事だ。

生き返らせた命をまた奪うのは嫌だし、親子はあのまま放置する事にする。
それより気になるのはもつと一般的な魔法の技術体系だ。

「ふむ…基本的には『デバイス』つてのを用いて魔法を発動してるので。

魔力さえあれば使えるからこそその普及率、と」

しかも、この建造物で動いている大半のものは使用者がいなくとも動かせるようになっていた。

魔法については魔力炉というものでエネルギーを生成して動作させているらしい。
なかなか面白い。

ウチの国でも魔道具の類は結構開発に成功しているが、ここまで汎用的で高度なものではない。

ウチの開発陣がもつと高度なものを作成できるようになつたら、俺の世界とこの世界で異文化交流してみるのも面白いかもな。

さらに色々と情報を追つてみる。

すると、驚いたことにこの世界は複数の次元世界で構成されている事が判明した。

どうやら『ミッドチルダ』という世界を中心にして、多くの次元世界が交流を行なつてゐるらしい。

無論全ての世界ではなく、交流のある世界は《管理世界》、交流のされていない世界は《管理外世界》と区分されていた。

区分の仕方としては、ある程度魔法技術が発達し、かつ管理局の庇護下に入る事を承認した世界が《管理世界》になるみたいだな。

そんで、それ以外が《管理外世界》と。

ざつくりとした区分だが、そんな感じで捉えていいだろう。

「ふむ……このミッドチルダつてどこにも行つてみたいな」

データを見る限り、相当発展してそうだ。

他の連中（主に友人の竜とか妖精とか）を連れて行くのは不安なので、あくまで一人でお忍びという事になりそうだけれども。

そうと決まれば、この建造物（データベースで調べたら《時の庭園》と言うらしい）から別の次元世界に出発だ！

俺は（シエルさんの力で）データベースの情報を全てまるつとコピーして、この場を後にした。

～～～～

時の庭園に備え付けられている次元転送装置はまだ生きていた。

早速装置を起動させ、行き先をミツドチルダに指定しようとしたが……

「ありや、ここからだと遠すぎるのか」

転送先の項目にミツドチルダの名前はあつたが、距離が遠いので行けないとの事だつた。

次元転送というのだから、いろんな意味での距離とか無視してくれても良いと思うが……
仕方がないので、転送履歴を遡つて近くの次元世界を検索する。

「最近だと『第97管理外世界』つて所に頻繁に行つてるな。でも、管理外世界かあ……」
正直がつかりである。

魔法に支えられる異文化を見たいのに、魔法技術のない所に行つて意味があるのだろうか。

「そういえば、時の庭園つて次元航行ができるんだつたか」

データベースにそのような事が書かれていた。

であれば、目的地をミツドチルダにしてみても良いかもしねない。

さつき助けた親子が時の庭園の主みたいだし、ちょっと相談してみよう。

＼＼＼＼＼

幸せな夢を見ていた気がする。

ふと、目が覚めた。

「ここは……」

あたりを見回すと、白を基調とした部屋の内装が見える。

開かれた窓からは、そよ風が入り込みカーテンを揺らしていた。

ここは一体どこなのだろうか。

見覚えがある気もするが、寝起きの頭ではよくわからない。

視線を下に落とす。

そこには

「つ……アリシアッ！」

最愛の娘が、自分と同じようにベッドに寝かされていた。

私の声が大きかつた為か、彼女は身じろぎをする。

「う、ううん……ママ……」

「つ！」

息を飲んだ。

今、確かに私を呼んだ……！

自分は、まだ夢の続きを見ているのだろうか？

触れたら壊れてしまうんじゃないかと、恐ろしくて、けれど、確認せずにいられなくて、恐る恐る、アリシアに手を伸ばす。

指先が、アリシアの頬にそつと触れる。

「あ——」

その指には、確かな体温と、呼吸の動きが感じられた。

「あ……ああ……っ……アリ、シア……っ！」

我慢できなくて、寝ているアリシアを抱きしめる。

情動の赴くままに力強く、けれど、壊れてしまわないようにそつと優しく。

「んう……ママ……？」

アリシアが私を呼ぶ。

抱きしめる腕に力が入る。

この声が、嘘ではないのだと証明してくれる事を願つて。

「ママ、泣いてるの……？」

アリシアが怪訝そうな声をあげるが、喉からは嗚咽しか出てこない。

自らの頬に伝わる涙は、止められそうになかった。

／＼＼＼＼

「よつ。二人とも起きたみたいだな。調子はどうだ？」

助けた親子が起きたようなので、様子見に顔を出す。

親の方の顔には涙の跡が見えるが、顔色を見る限り親子共に大丈夫そうだ。

「アナタは、一体……」

親の方が反応した。

疑問ももつともだし、ここは自己紹介するとしよう。

「俺はリムル＝テンペストと言う。よろしくな！……んで、お前達はなんて言うんだ？」

データベースをハッキングしたのでなんとなく予想はついてるが、一応名前を聞いておく。

すると、親の方がおずおずといつた様子で反応した。

「……私は、プレシア・テスタークサ。こちらは、私の娘のアリシアよ」

プレシアはアリシアを大切そうに抱き抱えている。

アリシアの方も嬉しそうにプレシアの腕に顔を埋めながら、こちらを上目遣いで見て

きた。

「あ、アリシア・テスター口ッサです……その、よろしく?」

疑問形で返されたがまあいいだろう。

俺が領き返すと、アリシアは真っ赤になつてプレシアの腕に顔を埋める。名乗られた名前は予想通りのものだった。

時の庭園の主であるプレシアと、プレシアが蘇生させようとしていた娘のアリシア。

どちらもデータベースで見た名前だ。

もう一人、アリシアのクローン体もいた筈なんだが……

少なくとも、ここにはいないようだな。

その事は一旦置いておいて、本題に入るとしよう。

「さて、薄々感づいているとは思うけど、君達を保護したのは俺だ。そこで、ちょっと相談があるんだけど、いいかな?」

プレシアが身体を強張らせる。

自らの腕にアリシアを隠すようにして、彼女は口を開く。

「その前に、確認したい事があるのだけれど……いいかしら?」

俺が領くと、プレシアは意を決したようにこちらの目を見た。

「その……アリシアを生き返らせたのは……アナタなの……？」

「ああ。ついでに言うと、プレシアの身体を治したのもな」

「つ……そう……なのね」

プレシアはそこで目を瞑り、幾許かの時間をかけてゆっくりと目を開いた。

「わかりました。アリシアを生き返させてくれて……本当にありがとうございます。私に出来る事ならなんでもするので、アリシアだけは……」

そう言つて、彼女はアリシアを強く抱き締める。

アリシアの方は若干困惑気味だが、静かにしていた。

大事な話をしていると肌で感じ取つたのだろう。

「そんなに怯えなくても大丈夫だよ。俺からそちらに要求したい事は2つ。この『時の庭園』をミッドチルダに向かわせる許可が欲しいってのが一つ。もう一つは、君たちには俺の国へ来てもらいたいんだ」

プレシアは俺の意図が掴めず困惑しているようだ。

「ごもつともなので、もう少し説明する。

「まずは俺自身がミッドチルダに行つてみたいから『時の庭園』を貸して欲しいのが一つ目の理由。二つ目の理由については……多分だけど、プレシア達はミッドチルダに行つたら困るんだろ？だつたらウチに来てみないか？まだまだ発展途上だけど、きっと気に

いると思うぜ。ま、タダ飯食わせる余裕とかはあんまりないから働いてもらうことにはなるだろうけどな」

小さい子供がいる手前詳細はぼかしたが、データを見た感じ犯罪まがいの事をしてたようだしな。

プレシアがこのままミッドチルダに行つてもおそらく捕まるだろう。

優秀な研究者だつたみたいだし、それならばウチの研究者として迎え入れた方がお互いに利益はあると思つての提案である。

プレシアは俺の言葉を聞いて少し逡巡していたが、どうするか決めたようだ。

「……わかりました。あなたの国にお世話をになりたいと思います。時の庭園はあなたの好きなようにしてください」

彼女はしつかりとこちらを見つめて言い切る。

不安もあるだろうに、それを見せない力強さが彼女の目には宿つていた。

俺は鷹揚に頷く。

「わかった……安心しろ。後悔はさせないからさ。それじゃ、早速行くか」

「…え？」

ディファレンテート
ゆっくりと彼女達に近づき、『異世界への門』の魔法陣を展開する。

そして、そつと親子に触ると魔法陣の輝きが強まつた。

「きれー……」

「つ……これは、一体つ？」

「テンペスト『魔国連邦』へ2名様ごあんない♪つてな」

さらに一層光が強まり、室内が光で塗りつぶされる。

しばらくして――

光が収まつたその部屋には、誰もいなかつた。

＼＼＼＼＼

その後。

『魔国連邦』の研究所に、新たな人員が入つた。

最愛の娘と共にやつてきた彼女は、発達していない文明に戸惑いながらも精一杯生きていく事にしたようだ。

彼女はその画期的な魔法技術を駆使し、これから多大な功績を上げる事になるが、それはもう少し未来の話である。

余談だが、愛娘を微笑んで見つめている彼女の表情は、なぜかいつも若干の陰りがあるらしい。

まるで、何かを悔いでいるかのように。

2話

From : 『時の庭園』

「再び時の庭園に到着～つと」

『魔國連邦』で親子を開発チームのシンジ達に任せた俺は、再び『異世界への門』で時の庭園へと戻つて来ていた。

「さてさて……ミッドチルダへいざ行かん！」

テンションが高いままに、鼻歌なんぞを口遊みながら俺は時の庭園のコントロール室で行き先を操作する。

「ミッドチルダ、ミッドチルダつと。あつた。ここだな」

ポチッとなーなどと言いながら行き先を変更する。
あとは自動操縦だ。

楽なものである

高度な文明つてやっぱ良いよな……

文明をもつと発達させる決意をした瞬間である。

「さて、と。到着までまだ時間かかるみたいだし、『時の庭園』の修理でもしますかね」

無論、行き先であるミッドチルダについての勉強もしながら。

～～～～～

しばらくして。

ミッドチルダ付近に着いたというアナウンスが『時の庭園』に流れた。
正規の手順だと、この後は次元航空艦用の港に泊めて入国（入界？）するらしいのだが、残念ながら『時の庭園』は非正規の艦だ。

パスポートとか、身分を証明するモノも無い。

仕方がないので、不正入国（入界？）する事にした。

その場から飛び立ち、時の庭園を保護している力場の外に出る。

「なんか久しぶりだけど……喰らい尽くせ！つてな」

言葉と同時に『時の庭園』そのものを全部胃袋に収納した。

あとは、ミッドチルダに転移するだけだ。

「座標データはあるから大丈夫だとして……入国管理のセキュリティとかあるだろうけ

ど、突破可能か?」

「問題ありません。実行可能です」

「OK。よし、行こうか」

シエルさんが言うのであれば間違いはないだろう。

俺は演算をシエルさんに丸投げして、その場から転移した。

~~~~~

From : ミッドチルダ西部、エルセア

とうとうやつて来ました! ミッドチルダ!

ここはミッドチルダの西部、エルセアという場所らしい。  
パツと見は近未来の郊外つて感じ。

車には普通に車輪があつて飛んでたりはしないし、モノレールらしきものがそこら中  
を走つている。

都市設計をある程度徹底してるので美しい街並みだ。

歩道を歩く人々は多様な人種が見かけられ、白人や黒人、黄色人種といった地球上にい

るような人種以外にも、耳が長かつたり獸耳が生えている人とかもいる。  
さすがに明らかに魔物らしい人影は見かけないので、異種族間交流は基本的に亞人までなのだろう。

ふーん、ほーう、とか言いながら街を歩いていると、奇異な視線を感じた。  
周囲を見渡すと、珍しいものを見るような目で人々が俺を見ている。

中には、クスッと笑つてる人もいるようだ。

(あつ、これじや俺、完全に田舎者まるだしじやないかつ)

急に恥ずかしくなつてきたので、顔を伏せつつ人目をかいくぐるように移動する。  
ちようど人の少ない細い路地を見つけたので素早くそこに入つた。

(あー、恥ずかしかつた……)

一息ついた俺はこのまま細い路地を進むことにする。

なんか事件の起きそうな怪しい路地だと最初は思つたんだけど、意外と綺麗だつた。

治安はそれなりに良いんだろう。

表通りでも、現代日本の東京と遜色ないくらいには人々は無防備だつたしな。

良いことだなど、うんうん頷きながら歩いてたら悲鳴が聞こえた。

割と怯えたような声だつたので、ただ事ではなさそうだ。

(治安が良いつて思つた矢先にこれが!)

悲鳴の発生源は、俺が歩いている路地を少し先に行つた場所っぽい。  
とりあえず、現場を見に行く事にした。

そこでは――

「お兄ちゃんっ！」

「大丈夫だティアナ。……俺は管理局のティーダ・ランスター二等空尉だ！お前らを窃盜及び器物破損、暴行未遂の現行犯で逮捕する！」

「管理局か？!とはいえ一人じや何もできないだろうが！お前ら、あいつを袋叩きにするぞ！」

「へつ、公務執行妨害罪も追加だな！」

顔をバンダナとかで隠した、10人ほどのガラの悪い連中に囲まれている少年と、その妹らしき幼女がいた。

その近くでは建物の窓が割れており、宝飾品がいくつか地面に落ちている。  
どうやらテンプレ的な宝石強盗らしい。

周辺にいた人たちが悲鳴をあげて逃げている。

強盗達は笑いながら少年達にじりじりと近づく。

このままでは酷い暴力沙汰になつてしまふだろう。

だが――

「おせえ！」

「がつ!?」

「ぐあつ!?!」

意外な事に、少年はその体捌きのみで瞬く間に強盗の2人を無力化した。

あの年齢で見事と言う他ない。

少年はそのまま何かを呟き、一瞬で服装を変更した。

拳銃のような物も2挺握っている。

おそらく、あれが戦闘時の格好なのだろう。

解析してみると、拳銃のような物はデバイスという魔法を補助する機械らしい。

『時の庭園』のデータベースとも照合したから間違つてはいない筈だ。

その拳銃のようなデバイスから魔力でできた弾を打ち出し、次々と強盗を無力化していく少年。

強盗側もデバイスを持つて魔法で応戦するが、軍配は少年の方に上がっている。

無力化された強盗が無傷なのを見ると、『非殺傷設定』で戦つてみたいだな。

ちなみに『非殺傷設定』とは、純粹な魔力によるダメージで物理ダメージのない攻撃の事を指す。

『時の庭園』でコレを見た時は、俺の世界でも使えないかと思ったものだが……。

この世界や、俺の前世の世界などはいわゆる物質界……物質体の影響が非常に大きい世界である。

それに対し俺の世界は半物質世界なので、物質体だけでなく、精神体の影響も大きい。

つまり何が言いたいのかと言うと、魔力ダメージは精神体に多大なダメージを与えてしまう為、ウチの世界で『非殺傷設定』で攻撃したとしても、普通に殺してしまう可能性が高いのだ。

そう美味い話は無いのである。  
さて。

話は戻つて少年の方だが、強盗の完全無力化まで残り僅かといったところだ。  
このまま眺めていても大丈夫かなとか思つたんだが……残念ながらそうはいかないらしい。

杖を持つた強盗の一人が、少年の妹に狙いをつけたからだ。

少年はそれに気づいていない。

強盗の方は『殺傷設定』にしているみたいだし、下手したら少年の妹は死んでしまうだろう。

「おらあ！」

幼女に狙いを定めた強盗がニヤリと笑いながら魔力弾を撃つ。

流石にそれを放置するのは後味が悪いので、俺も手を出す事にした。  
強盗と幼女の間に割り込む。

魔力弾をパクリと《胃袋》に取り込んだ。

「何!?

「つ!? テイアナ!」

魔力弾を撃つてきた強盗が驚いたが、少年も幼女に攻撃された事に気付いたのだろう。

動きが硬直し、視線がこちらに向かってしまっている。

強盗達はその隙を逃さなかつた。

幼女に向けて攻撃しなかつた他の強盗が少年に向けて攻撃しようとしているのが見える。

「お兄ちゃんっ!」

「つ!」

幼女が叫び、少年が再び強盗に向き直ろうとするも間に合わない。

そんな少年の横を複数の光が疾る。

ドドドンッ! という音と共に、光は残りの強盗を打ちのめしたのであつた。

光の正体はもちろん、俺の攻撃である。

この世界の『非殺傷設定』を解析したので、同じく純粹な魔力ダメージによる攻撃を試してみたのだ。

結果は成功。

強盗達を無傷の状態で倒すことができた。

「無事に終了つと。少年。その勇敢さと強さは認めるが、近くに守る相手がいる場合はもうちよい慎重になつた方が良いぞ」

そう言つて俺は横に立つ幼女の頭をぽんぽんと撫でる。

幼女と少年はハツとしたような顔になつて、お互に驅け寄り抱きついた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！うつ、うう……」

「ティアナ！無事か？どこにも怪我はないか？」

「ぐす……うん、だいじょうぶ。あのお姉ちゃんが守つてくれたから」

そう言つて幼女は俺を指差す。

幼女よ、俺は男であつてお姉ちゃんではないぞ。

とも思つたけど、兄妹の感動の抱擁に水を差す気はないので心の内で言うだけに留めた。

少年は自らに抱きついて離れない幼女を抱き上げて、こちらにやつてくる。

「妹を助けて頑張って、本当にありがとうございます。俺はティーザー・ランスターと言います。こつちは妹のティアナ。何かお礼ができればと思うのですが……」

そう言つて少年はチラリと倒れた強盗達を見る。

「気にしなくていいよ。それよりも、アイツラを拘束する方が先だろ？妹さんは見守つといてあげるから、行つておいで」

「何から何までみません、恩に着ます！ほら、ティアナ。俺はやることがあるから、このお姉ちゃんと一緒にいてくれ」

「ううく、やだっ！」

必死にティーザーにしがみつくティアナ。

さつきの事がよつぽど怖かつたんだろう。

このままだと強盗が起きてしまうかもしないので、俺もティーザーに加勢する。

「ティアナちゃん。このままだとお兄ちゃんがちやんとお仕事できないよ？ そうなると、あそこの怖い人たちが起きて、また怖い事になっちゃうかもしれないからさ。俺と一緒に待つてようぜ？」

「ううく……」

俺の言つた事を理解してくれたのか、ティーザーを掴む手が少し緩んだ。  
聰い子なのかも知れない。

俺は置み掛ける。

「お兄ちゃんの言う事をちゃんと聞いたら、ご褒美にコレあげるからさ。ちょっとだけ辛抱しよう?」

「う……？」

俺は大人の親指サイズの綺麗な丸い物体をティアナちゃんに見せる。

その正体は、いつもより強めに保護した『回復薬の魔素包み』。

我が国ではスライム形態の俺に似ているとの事で、結構人気がある。

ティアナに渡すこれは、特別仕様という事でスライムの俺と近しい形になるようになた。

触りごちはツルツルぷにぷにで、通常の『回復薬の魔素包み』と違つて簡単には破けない。

護身用かつ子供の才モチヤにもなつて一石二鳥なのだ。

名付けて『スライムもどき（回復薬入り）』。

試しにティアナに触らせてみると、その見た目と触り心地を気に入ってくれた様子。素直にティーダから離れて、俺のところに来てくれた。

「よし、いい子だな。待つての間はそれで遊んでるといい」

「すみません、ありがとうございます。えーと……」

「リムル・テンペストだ。ほら、行つてきな」

「ありがとうございます、リムルさん！ テイアナも、すぐに戻つてくるからちやんといい子にしてるんだぞ？」

「うんっ！ わかつた！」

ティーダは慌ただしくも強盗達のところに戻つていき、その一人一人を拘束し始めた。

どこかと連絡もしているようで、おそらくは管理局の仲間を呼んでいるのだろう。あの年なのにもう随分と手馴れている。

ティアナはそんなティーダを尊敬の眼差しで見つつ、俺の渡したスライムもどきで遊んでいた。

＼＼＼＼＼

暫くして。

管理局の局員らしき人たちに強盗が連行されるのを見届けた俺は、ティーダ達と向かい合っていた。

「今日は助かりました。強盗の捕縛協力に加えてティアナのお守りまで……本当に、あ

りがとうござります。リムルさん

そう言つてティーダが頭を下げる。

「気にしなくていいさ。困つてたらお互い様つてね。ティアナもスライムもどきを気に入つてくれたみたいで良かつたよ」

「うんっ！ ありがとーリムルお姉ちゃん！」

「お姉ちゃんじやなくて、お兄ちゃんなんだけどな？」

とか言つてみたが、ティアナに俺の言葉は届かなかつた。

軽くスルーされてスライムもどきを触るのに夢中になつてしまふ。

「あはは……すみません。それで、なんですが」

苦笑していたティーダが真面目な顔になつた。

「改めまして、リムルさん。今回は本当にありがとうございました。管理局として、あなたのその功績を讃え、感謝状と金一封をお渡しできると思うのですが……」

どうしますか？ と言外のその目が語つていた。

「この世界で無一文の俺にとつて正直、金一封はありがたいが……

「やめておくよ。勧誘とかされても困るだけだし、その功績はティーダ君が貰つといてくれ」

「そうなのだ。

『時の庭園』のデータベースにアクセスした時に知った事だが、管理局は常に人手が足りていらないらしい。

その状況で強盗を捕縛した一般人なんて出て来たら、勧誘の嵐がやつてくるのは想像に難くない。

なので、ここは断ることにした。

まあ、受けると不正入国したことがバレる可能性が高いので、そういうふた意味でも受け取れなかつたりはするのだが。

ティーダは若干残念そうにしたが、仕方がない。

「そうですか……いえ、これはあまり深入りする話でもありませんね。それでしたら、この後ティアナと一緒に昼食を食べる予定だつたんですが、リムルさんも如何ですか？」

良い店知つてますよ、と続けたティーダに対し俺は「是非」と応えた。

ミッドチルダの食べ物にも興味あつたし、奢つてもらえるんだつたら是非はない。

そうして俺たちは、ちょっと遅めの昼食を取るのだつた。

～～～～

その後、公園でティアナと一緒に遊んだりした俺は、別れ際にティーダにも『スライ

ムもどき》をあげることにした。

「これは……？」

「ティアナにあげたのと一緒の奴だけど、まあ御守りだ。持つておくと、何か助けてくれるかもしないぜ？」

「はあ……」

半信半疑になりつつも、ポケットに《スライムもどき》をしまうティーダ。

そんなティーダとは対照的に、ティアナの方はご機嫌だ。

「えへへ、お兄ちゃんもティアナとおそろいだね！」

「そつか……ああ、そうだな。ティアナとお揃いだ」

ティアナの喜ぶ姿を見て、ティーダもその顔を綻ばせた。

その姿に満足した俺は、身を翻した。

「それじゃ、ティーダ、ティアナ。またなー」

「はい、リムルさん。また機会があれば！」

「リムルお姉ちゃん、またねっ」

バイバイ、と声をあげるティアナに手を振りながら、俺はその場を後にした。

# 3話

From：ミツドナルダ西部、エルセア

ランスター兄妹と別れた俺は、夕暮れの街を歩いていた。  
辺りでは帰りを急ぐ子供達や、犬の散歩をしている人、スーツを着て忙しそうに歩いている人など、多くの人たちを見かけた。

本当に、地球と変わらない。

穏やかな風景がそこにはあった。

俺は郷愁を感じつつも、それを楽しむようにゆっくりと歩いていく。  
すると……小さな子供の、泣き声が聞こえた。

「ひつぐ、ぐすつ……ギン姉、おかあさん、どこ……？」

どうやら迷子のようだ。

道の片隅で、しゃがみこんで泣いている。

その子を見ていると、俺も小さな子供だった頃を思い出す。

（俺も、昔迷子になつて泣いた事があつたつけ）

なんとなく懐かしくなつて、その子供に近づく。

「どうしたんだ？お母さんとはぐれちやつたのか？」

俺もしやがんで子供に目線を合わせ、殊更優しく声をかける。

子供は声をかけられたことに驚いたのか、目を丸くしてこちらを見た。

「ぐすつ……うん……おねえちゃん、だれ？」

「お姉ちゃんじやなくてお兄ちゃんなんだけどな？俺は、リムル。リムル・テンペストつ

て言うんだ。君はなんて名前なんだ？」

「スバルは……スバル・ナカジマ」

「スバルちゃんか。よしよし、よく言えたな。それじゃ、おかあさんが見つかるまで、お兄ちゃんと一緒にいようか？」

「うん……」

苦笑しつつ、頭を撫でながら提案するとスバルは頷いてくれた。

だが、ただ待つてるだけというのもスバルを不安にさせてしまうかもしないので、おちよつとしたものを見せる事にした。

「ほら」

「わあ……すごいすごい！」

何をやつているのか一言でいうと、あやとりだ。

ブランコ、ちようちよ、東京タワー……などなど。

色々な物を、色をつけた鋼糸で再現して見せた。

それに対してもスバルは目を輝かせている。

スバルの反応に気を良くした俺は、シエルさんの力も借りてよりダイナミックに、全身を使つて色々表現する。

そうやつて夢中になつていると……

パチパチパチ！

気がつくと、周囲にはギヤラリーができていた。

中には、足であやとりするため脱いだブーツにおひねりを投げている人もいるくらいだ。

なんとなく恥ずかしくなつた俺は、ササッと糸を仕舞い、その場で優雅に片足で一礼した。

最後に割れんばかりの拍手と歓声が上がり、その場はお開きとなつたのだが……

「あっ、えーと、だな」

しまつた。

またスバルが泣きそうになつてしまふ。

ギヤラリーを集めてしまうのを覚悟で再度やるしかないか?と思つたところ——  
救世主が現れた。

「スバル!」

「あつ!おかあさん!ギン姉!」

人垣を分けて、親子が現れた。

スバルの反応を見る限り、あれがスバルの母親と姉なのだろう。

母親はスバルを抱きしめて、無事だった事に安堵している。

姉の方も、そんな二人と同様に安心した表情だ。

「もう、心配したんだから……大丈夫?寂しくなかつた?」

「だいじょうぶだよ、おかあさん。あのおねえちゃんがいろいろすつごいの見せてくれたの!」

そう言つて俺を指差すスバル。

母親は、俺に気がついて礼を述べる。

「すみません、この子が世話になつたみたいで……でも、本当にありがとうございます」「気にしないでください。俺も旅の者なんで予定は無かつたし……困つた時はお互ひ様ですから」

このやりとり、さつきもやつたな。

今日はつくづく子供に縁のある日みたいだ。

「それでも、助かりました。私はクイント・ナカジマ。こつちが長女のギンガ。そしてこの子が次女のスバルです」

「俺はリムル・テンペストと言います。スバルはいい子でしたよ」

クスッと微笑んで自己紹介を済ませる。

すると、クイントさんは何を思ったのか、是非お礼をと言ってきた。

「もしよかつたらなんんですけど……今夜特に予定がないのでしたら、お礼に夕食なんて如何ですか？」

その提案は魅力的だ。

今日の宿すらも決めていないので、俺はありがたくその提案を受ける事にしたのであつた。

「ありがとうございます。そう言う事でしたら、是非ご相伴にあずかりたいと思います」

~~~~~

From : ミツドチルダ、ナカジマ家

ナカジマ家に行く道すがら、スバルに見せてたあやとりをギンガとクイントにも見せつつ、俺はナカジマ家にお邪魔させて貰つた。

夕飯ができるまで少し時間がかかるとの事だつたので、それまではギンガ、スバルと遊んで過ごした。

あやとりしたり、パフォーマンス目的で魔法をいくつか見せたり。

そうこうしていると、夕飯ができたようだ。

「（ご）はんできたよー」

「はーい！」

姉妹が真っ先に駆けて行く。

そんな姉妹の様子に苦笑しつつ、俺もゆっくりと後を追つて行くのであつた。

＼＼＼＼＼

ナカジマ家の食卓は、なんというか凄かつた。

内容自体は普通の日本の夕食つて感じなんだが……

量がとてつもなく多い。

一人一人に配膳されたご飯と味噌汁だけでも、大人5人前くらいはあるんじやないだ

ろうか。

おかげの唐揚げや煮物、サラダなんかも山のように盛り付けられている。

これをスバルとギンガみたいな小さな子が食べられるのか心配になつたものだが

…

その心配は杞憂であつた。

元気よく「いただきます！」と言つた後は、2人ともかなりのペースで箸を進め、あつという間に平らげてしまつた。

「「ごちそうさまでした！」」

大人顔負けの健啖家である。

思わず拍手をしてしまつた。

「おー。小さいのに2人ともよく食べるなあ。あ、クインントさん。ごちそうさまでした。とても美味しかつたです」

「はい、お粗末様です。でも、リムルさんも流石ですね。私達もそれなりに食べる量が多いという自覚があつたんですが、それについて来れるとは思いませんでした」

「あはは……まあ、普段から体を動かしてますからね」

本当のところは俺がスライムだからなんだけど、それをそのまま言うのは憚れたので言葉を濁す。

それにしても、クインントさんも相当だ。

スバル達よりも多い量を食べてるのにケロツとしている。

まあ、俺もクインントさんと同量を食べてたりするのだが。

「そういえば、リムルさんって普段は何をされているんですか？」

食後のまつたりした時間。

食べたばかりにも関わらず、スバルとギンガはまたきやいきやいと遊んでいる。

俺がさつき見せたあやとりを真似しようとしているようだ。

そんなのほんとした時間に、ちよつとした世間話といった様子でクインントさんが質問してきた。

さすがに「魔王やつてます」とは素直に言えないので、言葉を濁す事にする。

「普段は自分の世界でデスクワークとかをしてますね。一応、公務員なもんで」

「あつ、そう言えば、こっちでも「公務員」つて通じるのかな？」

「あら、そなんですか？私達と一緒にですね」

微笑みながら答えるクインントさん。

どうやら「公務員」でも通じるようだ。

それにもしても、少し気になる点があつたな。

「私、達？」

「ああ、すみません。私と夫は二人とも管理局の局員をやっているんですよ」

ちなみに管理局とは――

正式名称『时空管理局』と言い、大雑把に言うと「次元世界をまとめて管理する、警察と裁判所が一緒になったところ」らしい。

他にも各世界の文化管理とか、災害救助とかもしたり、その業務内容は多岐に渡るようだ。

昼頃に会つたティーダも管理局の局員だそうで、今日は何かと管理局との出会いが多い氣がする。

「ま、現場での仕事が多いんですけどね」

言つてウインクするクイントさん。

とても二人の子供を抱えてるとは思えないくらい若々しい。

（ご主人様、スバルとギンガはクイントが出産した子供ではありません。クイントの遺伝子を用いて作られたクローン体に機械を融合させた『戦闘機人』です）

まじか。

よくよくシエルさんの話を聞くと、過去に管理局が摘発した事件の中には、違法な『戦闘機人』を取り締まつたものもあるらしい。

『戦闘機人』の作成自体、非人道的との観点から違法として取り締まつてているのだそう

だ。

確かに、スバルとギンガを解析してみると普通の人間とは違う身体構造をしている。

〈推測ですが、過去に管理局が摘発した『戦闘機人』関連の事件で保護したのがスバルとギンガなのだと思われます。遺伝子情報がクイントと同じというのも関係しているかと〉

なるほど……

チラリとスバル達を見る。

今は元気でやつてているが、過去はとても大変だつたんだな。

それを頑張つて育てているナカジマ夫妻。

色々とドラマを感じて、ちょっとじーんとしちやつたぞ。

「大変そうですね……」

「あはは……でも、やりがいはありますよ？男女関係なしに活躍できますし」

言外に、「入局してみませんか？」と言われているようで若干気まずい。
話を逸らすために、俺はある案を思いついたので実行する。

「ううんですか……ところで、折角ご馳走になつた事ですし、ささやかながらお礼をさせてください」

「そんな……気にしないで大丈夫ですよ？」

「まあまあ、そんなに大したものじゃないんで」

俺はそう言いながら、懐から出したように見せて《胃袋》からとある物を取り出す。取り出したのは、イヤリングだ。

なんの変哲も無い金属を加工し、綺麗に輝くようにカットしたガラスを嵌めただけのモノ。

そのガラスの中には、回復薬が仕込んである。

俺はそのイヤリングをクイントさんに手渡した。

「まあ！こんな高価そうなもの、良いんですか？」

「ええ。ウチの国の特産品なんですが、割と安価で手に入りますし。それに、はめ込んでるのはタダのガラスなんですよ。見た目がいいのでウチの国では老若男女問わずに買つてもらえる人気商品です。御守りにもなるんですよ？」

事実である。

回復薬仕込みのこの商品は、比較的安価で手に入る緊急護身用の一品だ。

装備している者が危機に陥った時に自動で割れ、回復してくれるというスグレモノである。

イヤリングという形なので、入れられる回復薬の量は微々たるものだが……まあ、あくまで緊急用なので問題は無い。

かさ張らず、見た目も良いので、多くの冒険者に愛用される一品なのだ。

「そうなんですか……フフツ。では、ありがとうございますね」

「そうしていただけると、こちらとしても嬉しいです」

「あー！おかあさん！何それー！」

「いいな、いいなー。スバルもほしい！」

ありや。

クインントさんに受け取つてはもらえたは良いが、子供達に見つかってしまった。
でもなあ……子供にイヤリングつて、ちょっと早い気がするしなあ。

「うーん、そうだな。ギンガとスバルにイヤリングはちょっと早いから、こっちのペンド
ントで我慢してくれないか？」

「わあ……」

「きれー……」

取り出したのは、ちょっと子供向けにデザインされたペンドント。

これも、イヤリングと同様にガラスで出来た品だ。

丁寧にガラスをカットしているので、これも綺麗に輝いている。

子供達も取り出したペンドントに視線が釘付けだ。

クインントさんが「良いんですか？」と視線で問うが、問題ないと頷く。

「ま、お近づきの印つてね。御守り替わりに持つておくといいかもよ?」

「うん!ありがとう!」

「ありがとー!リム姉!」

「スバル。俺はお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃん。な?」

「わかつた!リム姉!」

「……」

スバルは完全に俺をお姉ちゃんだと認識しているようだ……

仲良くなつて、呼び方が「おねえちゃん」から「リム姉」になつたのは進歩したと言つて良いのか悪いのか。

俺はがつくし肩を落としつつも苦笑する。

子供達は喜んでくれたみたいだし、とりあえずはこれで良しとするかな。
さて、と。

「それじや、そろそろお暇しますね」

「えー、もう行っちゃうの?」

「もつとあそぼうよー」

「うーん、ほら。あんまり遅くなつてもクイントさんと旦那さんに迷惑だからさ」「
実際、今日の宿すら決まつてないのだ。

眠る必要はないが、深夜に徘徊してお巡りさんの厄介になるのも頂けない。
さつき貰つたおひねりで、なんとか泊まれる所を探さないと……

「そういう事でしたら大丈夫ですよ。リムルさんさえ良ければ、是非泊まつて行つてください」

「……良いんですか？まだ会つたばかりの相手ですよ？」

「フフツ、リムルさん的人となりは何となくわかりましたからね。それに、私と夫は管理局の局員ですよ？何かあつたら、しつかりとつちめるので安心してください」

「お一怖……そくならないように気をつけます」

お互にクスッと笑いながらの応酬。

こういうのも悪くはない。

それに、宿を探す必要がなくなるのは助かるしな。

「それじゃ、今晚はお世話になります」

「はい、お世話します」

「やつた――！」

~~~~~

それからは、姉妹と遊んだり、一緒に風呂に入つたり。

「リム姉って、やっぱりおねえちゃんだよね。おとーさんと違うもん」

「あ、いや、違……もう良いか、それで……」

その時に少し見られて（ドコとは言わないが）、晴れて「おねえちゃん」認定されてしまつたり……

風呂を上がつた後は子供達に歯磨きさせて、子守唄を歌つて寝かしつけた。

「ねーんねーんこーろりーよ」

もちろん、シエルさんによる自動モードである。

小さい頃に聴いた子守唄なんて流石に覚えてないしな。

2人を寝かしつけた後、そーっと部屋を出る。

「あの子達の世話をしてくれて助かつたわ。ありがとう。それにしても綺麗な歌ね……でも、なんだろう？懐かしい感じがするわ……」

「そりやあ、ウチの先祖の故郷の歌だからな。大方、俺のお袋からでも聴いたんだろうさ」

子供部屋を出た所で、クイントさんと旦那さんが待っていた。  
どうやら、旦那さんはちよつと前に帰つてたらしい。

「どうも、はじめまして。リムル・テンペストと言います。今晚は厄介になりますね」「ああ、はじめて。俺はゲンヤ・ナカジマと言う。アンタがウチの娘を大道芸やつてまであやしてくれたってのは話に聞いてる。改めて、俺からも礼を言わせてくれ。ありがとう」

深々と頭を下げるゲンヤさんに、俺は慌てて手を振る。

「そんな、気にしないで下さい。俺もこうして泊まらせてもらつてる身ですしね」

「ああ。アンタみたいな別嬪さんならむしろ願つてもがつ!?」

おお……

クイントさんの見事なエルボーがゲンヤさんに突き刺さつてるよ……

ゲンヤさん悶絶して何も言えなくなつてるし。

そして当のクイントさんと言うと、何事も無かつたかのように微笑んでこちらに向き直る。

どことなく迫力があつて、ちょっと怖いと思つたのは秘密だ。

「ここ)で立ち話もなんですし、リビングの方に行きましょうか」

「あつはい」

~~~~~

「おーイテテ……しつかし、アンタ地球出身だつたんだなあ。さつきの子守唄、すぐかつたぜ」

俺まで寝る所だつたわ、とか言いつつ豪快に笑うゲンヤさんは、一本氣のある日本男児つて感じで好感の持てる相手だつた。

ウチの国だつたら、クロベ工に近い感じかもな。

「ええ。俺も、故郷に近しい人に会えるとは思つていませんでした」

「不思議な偶然もあつたものねえ……あ、リムルさん。もう一杯、如何ですか？」

「あ、それでしたら有難く。いや、泊めてもらうばかりじゃなく、お酒まで頂けるなんて、ほんと恐縮です」

「そんな気にしなくて良いのよ？むしろ付き合わせちゃつて申し訳ないくらいなんだから」

典型的な日本人っぽいやりとりをしつつ、俺の持つグラスに酒を注いでくれるクイントさん。

なんか、こういうやりとりも久しぶりで、ひどく懐かしい。

これも、郷愁の念つてヤツなのかもしれないな。

「しつかし、地球からとなると結構遠かつたろう？アンタ、どうやつてミッドチルダまで

来たんだ？」

ぎくつ

内心で冷やつとしたが、ここは冷静にお茶を濁すとしよう。

「実は、個人的な伝手がありまして……俺自身も魔力があるって事で、ミッドナルダここを紹介してもらつたんですよ」

大嘘である。

しかし、ナカジマ夫妻は俺の嘘を信じてくれたみたいだ。

「そういうえば、さつきもギンガ達に綺麗な魔法見せてくれたものね。デバイスもないのに大したものだわ」

「それほどでも……まあ、ああいう小手先の技なんかは得意ですしね」

「いや、それでも大したもんだ。俺は魔導師になれなかつたからな。羨ましい限りだぜ」ふむ。

そういうや、管理局も魔導師のみで構成されてる訳じゃないんだつけ。

現場で指揮をするのは魔導師でなくとも良いし、デスクワークの類で必要なのは戦闘力よりも優秀な頭脳だしな。

そういつた事を鑑みると、魔導師＝地位が高いって事にはならないのだろう。「てーことは、あれかい。リムルさんはミッドナルダで魔導師になりに来たのかい？」

「うーん、知己には勧められてるんですけどね。でも、国の公務を放り出す訳にはいかないんで、今回はあくまで見学つて所です」

「そうかい。そりや、残念だな。だが……もし」「ミッドチルダ」^{ミッドチルダ}が気に入つたつてんなら俺達からも推薦するんで、その時は言つてくれ。まあんまり評価の足しにはならないけどな

「あはは……機会があればよろしくお願ひしますね」

ちなみに補足すると、今の俺は魔力を持つてる関係で魔導師の知り合いがいて、その魔導師に勧誘がてらミッドチルダを見て欲しいと言われてやつてきた、という設定だ。「そういう事でしたら、明日ウチの訓練を見せましょか? ふふふ: 地上のエースと謳われるゼスト隊、その真髄をお見せしましょ!」

その提案自体は、この世界での戦力や魔法を解析できるので魅力的だ。

だが……怪しげに笑つてるクイントさんを見ると、どうにも不吉な予感しかしない。

「あー……その、すみませんが、街を見学に来ただけなのでそこまでは……」「遠慮しなくていいのよ? それで、何か良い所を感じてくれたたら嬉しいし!」

その後に「有望株G E T のチャンス!」と小声で呟いたのを俺は聞き逃さなかつた。

このままだとまずい気がするが、今のクイントさんを宥める有効な手段はありそうにない。

半ば諦めた心地で、俺は訓練の見学を承諾するのであつた。

4
話

F r o m : ミツドチルダ、管理局地上本部

翌日。

そんな訳でやつてきました、管理局！

ぶつちやけ、不正入国した事がバレないかドキドキしている俺。

そんな俺の内心を知る筈もなく、クイントさんは意気揚々と前を進んでいる。
一緒に来ているギンガとスバルも、そんなクイントさんに感化されたのかウキウキ気分だ。

ちなみにゲンヤさんはクイントさんと違う部署らしく、ここに来る途中で別れた。

今は先頭にクイントさん、その後ろが俺と、俺の手を掴んでギンガとスバルが歩いている。

「はい、着きました！ここが私の職場の訓練場です！リムルさんとギンガとスバルは、あそここの端の椅子で座つて待つてくださいね」

「「「はーい」」」

通された訓練場は、一言で言うと東京ドームみたいな場所だった。

広いグラウンドがあつて、東京ドームと比べて圧倒的に数は少ないが端の方に観覧席のような場所がある。

そして、何よりも目を見張るのは随所に設置された装置だ。

最初はなんか大きなカメラがあるな程度にしか思つてなかつたが、実際の所は違つた。

解析して判明した事だが、なんと『空間シミュレーター』と言う地形変更が可能な装置なのだ。

ラミリスの迷宮創造^{チイサナセカイ}にも似た事が地上でも再現できるとは……

正直驚きである。

この技術は是非ウチに欲しい思つた。

特に、闘技場でこの装置を使えれば、より舞台を盛り上がらせる事ができるだろうし

な。

そうして子供達と揃つて物珍しそうに周囲を見渡していると、程なくしてクイントさ

んと大柄な男の人があつて来た。

「みんなお待たせー。隊長、紹介します。こちらが今回の見学者のリムルさんです。リムルさんにも紹介するね。こちらの人が、ゼスト・グランガイツ隊長よ」

「はじめまして。リムル・テンペストと言います。今日はよろしくお願ひしますね」「ゼスト・グランガイツだ。入局希望の優秀な魔道士と聞いている。楽しみにさせてもらおう」

「えつ」

「ゼストおじちゃん！」

「おじちゃんひさしぶりー」

子供達に遮られたが、聞き逃せない単語が聞こえた。

入局希望つて、クインントさん一体何を吹き込んだんだんだけ!?

思わずクインントさんを見るが、さつと目をそらされる。

確信犯か！

「ゴホン！……えーと、入局希望ではないん 「それじゃ、そろそろ訓練を開始するよ！」
ええ……」

弁解しようとするも、クインントさんに妨害されてしまう。

クイントさんとゼストさんは、そのままさつさと訓練場の中央付近に行き、既に集まっていた部下達に号令をかけた。

「それでは、訓練を開始する！」

＼＼＼＼＼

訓練の内容は、さすが地上のエースという他無かつた。

基礎体力の向上から始まり、いくつかのチームに分かれて射撃、近接、補助などの専門的な技術の向上。

それから火事や洪水などの特殊なケースに備えての、空間シミュレータを使った訓練。

どれも相当なハイレベルで隊員の全員がこなしていた。

そして――

「よし……全員集合！これから模擬戦を行う！」

来た。

やつぱりあるよな、模擬戦。

『非殺傷設定』なんて便利なモノがあるのだ。

これを訓練に有効活用しない手はない。

その後、ゼストさんが簡単にチーム分けを行い、空間シミュレータで市街地を再現してから、各チームが激突した。

互いに鎧を削る白熱した戦い。

ゼストさんがバランスよく配分した為か、どのチームも良い勝負を繰り広げている。俺と子供達はそれに見入りながら、どこかのチームを応援したり、どっちが勝つかを予想したりした。

「——終了だ！全員集合！」

そして、全ての模擬戦が終わった後——俺と子供達は自然と拍手していた。クインントさんがそんな俺たちに気がついて、顔を綻ばせる。

訓練で汚れていたが、とても綺麗な笑顔だつた。

「俺たちの訓練は、どうだつた？」

いつのまにか、ゼストさんがこつちに来て感想を求めて来た。

「すぐかつた！」

「おかあさんかっこいい！」

子供達は無邪気に答える。

俺も、素直に賞賛するとしよう。

「ええ、本当に素晴らしい訓練でした。全員コンディションが高いのに加え、まとめてやつてるようになって各々のギリギリを見極めて訓練メニューを適切に変更しているようですし……この訓練メニューはゼストさんが？」

「まあ、俺だけではないがな。細かい所は副隊長達に見てもらつている」

「そうなんですね。いや、素晴らしい」

「お前も、参加してみるか?」

「えつ」

「いいですね!リムルさんもやってみようよ!」
「ええー……」

クイントさんもグイグイ来るなあ……

唐突にぶつこまれた感が半端ないんですけど。
しかも、なんか断れる雰囲気じゃないし……
はあ……仕方ない。

「まあ、ちょっとだけなら」

そう、言つてしまつた事を、少しだけ未来の俺は激しく後悔する事になつた。

＼＼＼＼＼

いや。

いやいやいや。

これ、おかしくね?

なんで……なんで俺が……

地上のエースと1on1なんてやる事になつてゐるんだよ！

そりや、他の隊員さん達が訓練終了直後で動けないのはわかるんだけどさあ……

「リム姉、がんばれー！」

「がんばれー！」

「リムルさん、期待してゐるよー！」

いや、クイントさん。

期待されても困るよ？

あー、しつかし、どうしようかなあ……

ぶつちやけ、普通に戦えば、ここの人たち全員を相手にしても負ける事はないと思う。
だけど、下手に実力見せちゃうと後が大変だろうしなあ……
主に勧誘とかで。

理想的なのは、適度に善戦したと思わせつつ、俺が負ける事。

可能であれば、他の隊員よりも弱く演出できれば尚良しだ。

正直難しいだろうけど……
こういつてはアレなんだが、ぶつちやけ俺は演技が下手だ。
それで騙してくれるかは、運次第つて所だろう。

うーん、なるようになるしかない……か。

そうこう思案していると、もう開始の時間になつたようだ。

「二人とも位置に着いた？ それでは……開始！」

クイントさんの号令と共に、模擬戦が開始された。

どうしようかまだ悩んでる俺は、正面に目を向けて

「つ！」

体を捻つて、緊急回避した。

速い！

開始して間もないのに、100mはあつた距離を詰められた。

そして態勢を立て直す間も無く、槍の穂先が次々と俺のいた場所を通過する。

おいおい……手加減とかないのかこの人！？

俺は反射的にゼストさんの後ろ数十mの所に瞬間移動した。

「ぬっ！」

そこで、《非殺傷設定》になるようにした魔力弾を複数展開し、ゼストさんを攻撃する。

だが、背後からの奇襲にも関わらずゼストさんは反応した。

振り向き様に自身に当たる最小限だけを槍で弾き、魔力弾をやり過ごす。

ぶつちやけ人間業じやない。

背後から音速以上の速度で飛んでくる弾を弾くつてどんだけだよ……

「そこか！」

「うおっ！」

ゼストさんは即座に俺を捕捉し、瞬く間に距離を詰めて来た。

俺の頭がさつきまであつた位置には、音より速い槍が既に貫いている。
というか、明らかに音速に近い速度で動いてるんですけど!?

仙人や聖人、神人でもない人間にこんな事できるのか？

〈魔法で身体機能の強化、保護を行い、更に高速移動魔法を用いてます。反応速度に関しては本人の訓練の賜物でしよう〉

つーことは、反応速度だけは努力でなんとかしたつて事かよ！

やつぱ人間業じゃねえわ……

そうこう考えている内に、既に百以上の攻撃を避けている。

ちよいちよい魔力弾で反撃してるんだけど、全部いなされるし……

「どうした。まだやれるだろう？」

勝手な事言つてくれるよ、ほんと。

しかも、ギアを上げたのか攻撃が更に速くなつてきたし。
さて、どうしたもんかな。

ちよつとだけ、本気でやつてみるか？

もちろん、極力スキルは使わない方向で。

こういう風に考へるつて事は、俺もゼストさんの熱気に感化されてるんだろう。けれど、今は良いかと思えてしまうから不思議だ。
さて、それじゃ

「反撃しますかね！」

「ぬつ?!」

左手を使い、襲い掛かつてくる槍を弾く。

ゼストさんは、思つたよりも強い力で弾かれた事に驚いたのか、僅かに隙を見せる。
(ここだつ!)

その隙を見逃さなかつた俺は、一步踏み込んでから、なるべく軽く、右手の掌打をゼストさんの胴体に叩き込む。

(手応えアリ!)

重い音と共に、ゼストさんは数十m離れたビルまで吹っ飛んでいき、激突した。

派手な音を鳴らしながらビルが崩れていく。

(あれ？もしかして、やり過ぎちゃつた？)

<いえ、ご主人様の打撃に合わせてゼストが後ろに跳んだのが原因です。勢いをつけ過

ぎてビルが崩壊するまでの速度になつてしまつたようですね>
ええ……

どんだけの勢いで跳んだんだよ。

若干呆れを含めた目で崩壊しているビルを見ていると、土煙の中からゼストさんが出てきた。

「あー……大丈夫?なんかすごいスピードでビルに突っ込んだみたいだけど……」
ちょっとした気まずさもあってか、思わず素で声をかける。

だが、そんな心配も杞憂だつたようだ。

「フツ……問題無い。それよりも……俺の見立て通りだ。やはり、お前は強いな」
うん?

一体どの場面で俺の強さに気付いたんだ?

こう言つちやなんだけど、妖氣は完全に隠してゐる筈なんだけど……

<最初に会つた時、ゼストから威圧されたので遮断しました。その事を言つてるんで
しよう>

うおい!

威圧されてたとか、全然気がつかなかつたぞ!?

もしかして、そのせいで模擬戦を最初から飛ばしてたのか!?

〈その通りかと〉

おお……

気付かない内に強者感を出しちやつてたらしい。

「フツ、フフツ……隠してたんだが、バレちゃしようがないな」

今更だが、とりあえずわかつてましたよアピールだ！

「？お前はそもそも隠してなんて無いだろう？」

グハアツツ!!

コ、心核にダメージが……！

「ま、まあそれは置いといて……そろそろ、この辺で止めにしないか？これ以上やると、訓練どころじやなさそうだし……」

「む……確かに、そうだな……負けたまま引き下がるのは癪だが、これ以上は施設を破壊してしまいかねん」

良かつた！

ゼストも納得してくれたようで何よりである。

そんなこんなで、波乱の模擬戦はようやく終了した。

観覧席に戻ってくると、それはもう酷かつた。

スバルとギンガからの「すごいすごい！」っていう賞賛は普通に嬉しかつたからともかくとして、クイントさんを始めとするゼスト隊からの勧誘が凄まじかつた。

「やつぱりウチに来ましようよ！」と言うのから「隊長を蹴落としてやつてくだせえ！」とか「是非俺の嫁に！」とかまで……

とりあえず、「俺の嫁に」発言した奴はブン殴つといった。

最終的に、「自分の世界で外せない職についているから無理！」と言うままで、この勧誘は続いたのであつた……

（――――）

「ねえ、リムルさん。それだつたら、嘱託魔導師だけでも試験を受けてみない？」

勧誘の嵐が終わつたと思ってたのも束の間、平穀をぶつ壊すかのように、クイントさんがブツ込んで来た。

「嘱託魔導師？ 臨時バイトみたいなものですか？」

「ええ。ウチは万年人手不足だから、そういった制度も設けてるの。中には学生とかもいるよ」

うーん、強制招集とか掛けられても行けない可能性が割と高いんだけど、それでも大

丈夫なんだろうか？

「俺、立場的に招集かけられても行けない事とか多いと思いますよ？」

「そこは大丈夫。任務を要請する事はあっても、強制はできない制度だから。受けるも受けないのも自由よ。注意点はいくつかあるけど、この資料を見てもらえばわかると思う」

そう言つてクイントさんが目の前にウインドウを開き、嘱託魔導師の資料を見せてくれる。

俺はウインドウをぎつとスクロールさせ、中身を確認した。

ふむふむ。

臨時バイトってのは確かだけど、一定の成果を上げないと、嘱託魔導師としての権利を剥奪されるみたいだな。

他にも当たり前だが、犯罪を行つたり問題行動を何度も起こしても同様に剥奪される。

後は、後見人が必要との事だが……

クイントさんを見遣る。

「後見人なら、私がやるから大丈夫よ？」

内心の懸念を見抜かれてしまった。

「ね、やつてみない？勿論、任務に對しての報酬は出るし。中には危険な任務もあるけど、ゼスト隊長を負かしたリムルさんならきつと大丈夫！」

おお……

熱烈な視線が辛い。

まあ、特に拘束されないのであれば、別にやつても良いかな？

この世界の通貨が手に入るのであれば、やぶさかではないし。

「うーん……わかりました。そういう事でしたら、囑託魔導師、やつてみようかと思います」

「ほんと！？ありがとう、リムルさん！」

クインントさんはよつぽど嬉しかつたのか、勢いよく俺に抱きついてきた。

それにつられてギンガとスバルも抱きついてくる。

俺は苦笑して、彼女たちをなだめるのであつた。

ちなみに後で知つた事だが。

この時の微笑ましい光景を写真に撮っていた者がいたらしく、その後ずつと当時のゼスト隊とナカジマ家の宝物にされてたんだとか。

聞いた時は、気恥ずかしいやらなんやらで、苦笑いを浮かべる事しか出来なかつたぜ

……

5話

From：ミツドチルダ、ナカジマ家

訓練が終わつた後。

俺は再びナカジマ家に厄介になつていた。

なんでも、嘱託魔導師認定試験まで少し日が空いてるから、それまでは泊めてくれることの事。

子供達は諸手を上げて喜んでくれた。

しかし、ただ泊めてもらうだけというのも悪いので、その間は子供達の世話や、家事なんかを俺がやる事にしたんだが……

「リムルちゃん。もし、万が一でも嘱託魔導師認定試験に落ちるようだつたら……ウチの家政婦にならない？」

俺の（というかシエルさんの）完璧な家事を見て、クイントさんがそんな事を言つてくる始末だ。

冗談めかしていたが、その目はマジだつた。

さすがに無理なので断つたけどね。

ん？試験勉強はしなくて良いのかって？

ハツハツハツ。俺にはシエルさんという最強の味方がいるんだぜ？

もちろん、全て任せのつもりですとも！

それで身につくか？と言われば、あんまり大丈夫とは言えないが……

まあ、問題は無いだろう。

嘱託魔導師として活動できる時間はそんなにないだろうし。

それに、わからない事があればシエルさんに聞けば良いのだ。
さて、と。

「おーい。ギンガー、スバル。お昼ごはんできたぞー」

「はーい！」

↓↓↓↓

From : ミツドチルダ、管理局地上本部

嘱託魔道士認定試験当日。

試験会場入り口で、後見人のクイントさんと、なぜかついて来たゼストに見送られてから、俺の試験は開始した。

試験について特筆するような事は特にない。

筆記試験はシエルさんパワーで満点だし、魔法の実技試験も俺にとつては特に難しいものでは無かつた。

試験官が、「デバイスもないのにこの規模と精密さとは……」とか呟いてた気もするが、気にしない。

気にならなければ無視でいいのだ。

懸念していた身分証明についても、後見人であるクイントさんがいてくれる関係でクリアした。

管理外世界出身という事も、身分証明を求められない理由の一つになつたようだ。そして、最後の試験である模擬戦だが……

なぜか相手はゼストだつた。

「マジかよ……」

「マジだ。お前の魔道士ランクは推定でもオーバーSだからな。試験相手を出来る者が少ないので」

「だから仕方ない」とかなんとか言つてるけど、明らかにこの前より戦意マシマシなんで

すけど!?

この野郎……この前負けたからつてリベンジするつもりかよ！
こうなつたら腹をくくるしかない、か。

あんまり大勢に実力を見せたくなかつたんだけどな……

半ば諦めの境地に達していると、ゼストが珍しく不思議そうな顔で口を開いた。

「そういえば前の模擬戦から疑問だつたんだが……リムル。お前はデバイスを使わないのか？」

「使わない。持つてないし、使つたこともないからな」

それに、あつた所でシエルさんの演算以上の結果を出せるとは思えないし。

「そうか……ククツ」

「お、おい……いきなりどうした？」

「いや、なに。デバイスも持たない一般人が、この俺に勝つとは、とな。世の中は想像よりも広いと思つただけだ」

「……そうかよ」

そんなんで笑うもんなんかね？

ほんと、前の模擬戦の時といい、よくわからない奴だ。
まあいいか。

ちやつちやと終わらせるとしましようかね！

／＼＼＼＼

そうして、お互にちょつとやる気を出しちゃつた結果。

勝負は中断され、勝敗は引き分けとなつた。

中断の理由は、模擬戦試験会場が深刻なレベルで破壊されてしまつた為だ。

試験官の人に「お願ひだからこれ以上壊さないでください！」って泣きながら懇願されてしまつたのだから仕方ない。

俺もちよつと申し訳ないとは思つたし。

心なしか、ゼストもどこか気まずそうにしていた。

まあともかくにも、そんなこんなで

「リムル・テンペスト。アナタをAAAランクの嘱託魔道士として認定します」

涙目の試験官から、晴れて合格を言い渡されたのであつた。

ちなみに、今回の試験で認定できる魔道士ランクは最高でAAAまでだつたらしい。

戦闘力だけで言えば間違いなくオーバーSと太鼓判を押されたが、これ以上のランクに認定されるには都度試験を受ける必要があるとの事。

魔道士としての実績とかも必要らしいし、これ以上は求めなくともいいかもな。ランクを一気に上げ過ぎて、悪目立ちするのも本意ではないし。

とりあえず、まずはいくつか適当に任務を受けてみるとしましようかね。

～～～～～

後に、この試験の事は色々な形で噂として広まることになる。

曰く、都市を破壊する怪獣がいる。

曰く、地上のエースの影に隠れたもう一人のエースがいる。

曰く、デバイスを使わないで100個以上の砲撃魔法を精密操作する化物がいる。
などなど……

試験内容は公開されないが、関係者の口から情報が漏れた為にこのようないい噂になってしまったようだ。

噂は一人歩きし、多くの物好きが噂の出所を確認しようと躍起になるが……それはまた、別のお話。

～～～～～

From : ミッドチルダ、ナカジマ家

「リムルちゃん、認定試験合格おめでとう！」

「おめでとー！」

「リム姉おめでとー！」

「嘱託とはいえ、管理局の一員みてえなもんだ。歓迎するぜ！」

試験が終わりナカジマ家に戻ると、ナカジマ一家が盛大にお祝いしてくれた。

部屋の飾り付けはギンガとスバルが頑張つてくれたらしい。

ゲンヤさんとクイントさんに至つては、今日の為に休暇を取得してくれていたようだ。

なにこれ。

ちょっと……いや、かなり嬉しい。

「ああ……みんな、ありがとな！」

その後は、今日の為に用意されたパーティー料理を食べ、大人組と酒を飲んだり、テレジョンの上がった子供達と遊んだり、仕事終わりに遊びに来たゼスト隊の人達と歓談したりした。

その中にはゼスト本人もいて、今日の模擬戦についてお互に反省したり……

「今日は、やり過ぎてしまつたな……」

「あー、試験官の子、泣いてたもんなんあ……」

「聞いたよー? なんでも、試験会場をめちゃくちゃにしたんですつて?」

クインントさんが意地の悪い笑顔で茶々を入れる。

「いや、めちゃくちゃにするつもりは無かつたんだけど、ゼストが俺の攻撃を弾いちゃうからさ」

「ぬ……それならば、最初からあのような特大の魔力弾など撃たねばよかつたろう」

「いやいや、一応あれは試験じやん? こういう事も出来ますよってアピールくらいはしとかないと」

「それにしても、あの数はやり過ぎだろう……」

ゼストが呆れているが、知った事では無い。

「こういうのは言つたもん勝ちだからな。

それよりも、だ。

「まあ、その話は置いといて。最初の任務はどうしようかねえ」

「おつ。だつたら、ウチの捜査を手伝つてくれやしねえか? 今ちょうど人手が足りなくてよ」

俺のボヤきにゲンヤさんが反応した。

「あれ？ ゲンヤさんの所つて陸上警備隊ですよね。捜査なんてするんですか？」

「ああ。ちよいちよいな。本局に突っぱねられるような、優先度の低い案件なんかはウチで捜査する事があるんだよ。まあ、大抵はイタズラの犯人探しとかなんだがな」

「へー、今はどんな捜査を？」

「人のデバイスに落書きされるつて案件だ。被害者は全員、気づかない間に落書きされてるらしくてな。まあイタズラだとは思うんだが、最近被害が増えてるらしくてなあ」

「ま、手頃そうな案件だし、肩慣らしにどうだ？」と聞いてくるゲンヤさん。

断る理由も無いので、承諾する事にした。

「そういう事でしたら、やってみます」

~~~~~

それから少しして。

簡単だと思つてたこの捜査は、なぜか最終的に巨大な闇組織を潰すまで続いた。

え？ 一体なにがあつたんだつて？

正直それは俺も知りたい。

いや知ってるけど、理解できない。

気がついたら別の次元世界でロストロギアを巡って戦争することになつたなんて、俺も信じたく無い話なのだから。

「フフフ、全ては『主人様の御心通りです』」

シエルさんがなんか言つた氣がするが、現実逃避する俺には届かない。

斯くして。

俺の名前は、管理局の伝説として長い間語り継がれていくことになつたのであつた。

／＼＼＼＼

「いやー、すごかつたねえ、リムルちゃんの大捜査。ベテラン捜査官も真っ青な仕事ぶりだつたんじやない？」

「あの案件、途中でウチから離れちまつたからなあ。あの後一体なにがあつたんだ？」  
ナカジマ家に戻るとナカジマ夫妻に色々聞かれたが、正直困る。

俺だつてよくわかつてないし。

ただ、ひとつ言えることがあるとすれば――

「しばらくは、任務やらなくとも良いかな……」

～～～～

その後。

のんびりしていたかった俺だが、世の中そう甘くはないらしい。

どこから噂を聞いたのか、いろんな所からの勧誘が凄まじくなつてしまつた。  
聞けば、最近では俺に接触する為にナカジマ夫妻へのアプローチも激しくなつてている  
んだとか。

このままだと子供たちにも悪影響が出ると判断した俺は、決心した。

即ち―――自分の世界に帰る決心を。

「そーいう訳で、ほとぼりが冷めるまではこつちに顔出さないようにしようかと思う」  
「ええ――――――」

「そんな……気にしなくてもいいのに」

「ああ、そうだ。お前さんはもうウチの家族みてえなもんだからな。いなくなると逆に  
調子狂うぜ」

「ナカジマ一家は惜しんでくれたが、それに甘えるわけにはいかない。  
なぜなら――――――

「そう思つてくれるのは嬉しいんだけど……ぶつちやけると俺、王様だからさ。あんまり長いこと国を空けると怒られるんだよ……」

「「えー、うつそだー！」」

「……」

まさかの全否定である。

何も言わなかつたが、ゲンヤさんまで呆れた目をしてるし。  
ちくせう。

「ほんとなんだけどな……まあいいか……とにかく、帰らないと怒られるのはマジなんだよ。だから、近いうちに大勢の前で帰ろうかなって」

人前で帰るのは、ナカジマ家にはいませんよつて言うアピールだ。

ただ忽然と姿を消しただけじゃ、まだナカジマ家にいるんじゃないかと疑われるだろう。

それでもしばらくは、俺を探してナカジマ家に聞きに来る人は出るだろうが……  
何もないよりかはマシつて程度だな。

「帰つちやうの……？」

今度は俺の言葉をちゃんと受け止めてくれたのか、子供達が泣きそうだ。

「リム姉行つちやだー！」

正直後ろ髪を引かれる思いだが……

俺は子供達をそつと抱き締める。

「ギンガ、スバル。元気でな。またいつか、絶対会いに来るから」  
ギューッと抱き締め返される。

俺は苦笑して、子供達の頭を撫でた。

そうしてると今度は後ろから抱きつかれる。

クイントさんだ。

「リムルちゃんも、元気でね。絶対、また顔を見せに来るのよ？」

返事をすると、頭に手を置かれた。

今度はゲンヤさんだ。

彼は何も言わず優しい目で、ただ頷いた。

俺も頷き返す。

それだけで、通じ合えたような気がした。

／＼＼＼＼

その日は、俺の送別会が開かれた。

ナカジマ家や、ゼストを始めとしたゼスト隊の面々、お世話になつたゲンヤさんのいる陸上警備隊の人達などに別れの挨拶をした。

みんな気の良い人達で、俺との別れを惜しんでくれていたのが素直に嬉しかつた。

＼＼＼＼＼

From：ミツドチルダ中央、首都クラナガン

翌日。

俺は、首都クラナガンに来ていた。

今は魔法使用OKの公園で、記者や俺を勧誘しようとしている人達大勢に囲まれている。

別に呼んだ訳じやないよ？

クラナガンに来たら囲まれただけである。

「是非ウチに来て頂きたい！」とか「闇組織を単独で壊滅させたのは本当ですか!?」とか色々聞かれていて、身動きの取れない状況になつてしまつたが……

関係無い。

俺は、俺の思うままに行動する事にした。

「諸君！色々と騒がせてしまつて申し訳ないが、俺は自分の世界に帰る！機会があつたらまた会おう！」

言いたい事だけ言つて、久し振りに『異世界への門』を開く。

今回は特別に、いつもより派手に展開する事にした。

積層型の壮大な魔法陣が、辺りを包み込む。

ミツド式ともベルカ式とも違う複雑怪奇な魔法陣に驚く周囲を余所に、俺はミツドチルダから姿を消したのであつた。

~~~~~

ちなみに余談だが。

この時の魔法陣を見た人達は、俺の事に關して様々な憶測をしていた。

ただのパフォーマンス目的で展開したデタラメな魔法陣だつて言う人から、未知の方式だとして、伝説のアルハザード出身者なんじやないかと疑う者、また、カメラやマイクなどの記憶媒体がデバイス含めて全て機能しなくなつてた事か

ら、俺の存在を集団的無意識の生み出した夢だつたんじや無いかと言う人まで。真相は全て闇の中である。

6話

From：ミッドチルダ西部、エルセア

久し振りにやつて来ましたミッドチルダ！
かれこれ10年ぶりである。

まあ、正確に言うと俺の世界じやまだ3年くらいしか経つてないんだけどね。
時間の流れが違うのか、ミッドチルダでは既に10年近く経過していた。
ウチの世界の3倍くらいの早さである。

ナカジマ家には悪い事しちゃつたな、と思う。
さてと。

ひとまずは、スバルを驚かしに行くとしようかな。
俺はすぐさま、スバルの元へと転移した。

～～～～

From：ミッドチルダ中央、首都クラナガン

転移した先はクラナガンだつた。

そこで、俺は驚く光景を目にした。

なんと、スバルとギンガが激しく争つてゐるのである！

大きくなつたな、とか、美人に成長したな、とかの感想が全部吹き飛んでしまうくらいの衝撃だ。

（おいおいおいおいおい！一体どうなつてんだこの状況！）

（ご主人様。ギンガは戦闘機人のシステムをハックされて操られてゐます。スバルはギンガを救う為に戦つてゐるのだと推測されます）

なんだと？

ギンガに手を出すとは、なかなか巫山戯た奴がいるじやないか。

絶対、後悔させてやる……

ひとまず、それは置いておくとして。

まずは目の前のスバルとギンガだ。

サクッとギンガの洗脳を解除して2人を介抱しようかと思つたが……
やめた。

明らかにスバルが追い詰められていたが、スバルはまだ諦めてない。ボロボロになりながらも、立ち上がるその目には確固とした覚悟と信念が見えた。少なくとも、最後まで見届けたいと思うくらいには……強い眼差しだ。

「フルドライブ！……ギア！ エクセリオン!!」

スバルのデバイスの出力が上がった。

これで決着をつけるつもりらしい。

光の道を走り、スバルとギンガが交差する。

何度も何度も、空を駆けながら拳や蹴りの応酬が続く。

二人は、一見互角に戦っているように見えた。

埒が明かないと思つたのか、ギンガが自らの手をドリルのように回転させてスバルを攻撃し、それに対してもスバルが拳をギンガへ突き出す。

互いの拳で、互いに相手の展開したシールドを破壊しようとする。

ほぼ同時。

しかし、数瞬早く相手のシールドを先に破つたのは、ギンガだつた。

だが――

「一撃…必倒おおっ!!うおおおおおおおおおおおおおおおお!!デイバイイン：バス

タアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

シールドを貫通したギンガの攻撃を間一髪でスバルが避け、渾身の砲撃魔法を撃ち込む。

ギンガが光に飲まれ、倒れた。

スバルの意地が、勝つたのだ。

＼＼＼＼＼

S i d e : スバル

「ハア……ハア……ツ……ふー…………よし。こちらスタートーズ3、ギン姉：ギンガ・ナカジマを無力化、保護しました！」

『こちらロングアーチ！了解した。スタートーズ4の援護が完了次第ヘリを向かわせる。…………お疲れさん、よくやつたな。スバル！』

「…………はいっ！」

よかつた……なんとか、ギン姉を確保できた。

強いギン姉に勝てた喜びよりも、今は助けられたっていう安堵の方が大きい。
あー…………ちょっと血を流しすぎたかな……

フラフラする。

けど、分断されたティアとの連絡はまだ繋がつてないし、事件は全然まだ終わつてい。

こんな所で、倒れてる場合じゃない……！

「よく頑張つたな」

「え……？」

とても、懐かしい声。

ハツとして顔を上げると、そこには10年前と変わらない、あの人の姿があった。

「リム……姉……？」

「おう。久しぶり、スバル。泣き虫だつたあの頃と違つて、強くなつたな」

リム姉はとても優しい目をして、あたしの頭を撫でてくれている。

不意に、視界が滲んだ。

「リム、姉え……！」

「おいおい。強くなつたと思つたのに、泣き虫なのは変わらずか？」

お調子者のように冗談めかしているが、その声からは労わりの気持ちが伝わつてき
た。

このままずつと撫でてほしいつて気持ちが、どんどん溢れてくる。

けれど。

「リム姉、ごめん。あたしは、ギン姉をへりに乗せたら、スグにでも皆の援護に行かないといけないから……」

あたしだけ、休んでる訳にはいかないんだ！

すると、リム姉はフツと笑つて……魔法陣を開いた。

「ほんと、強くなつたな……頑張ったスバルにご褒美だ。久しぶりに、嘱託魔道士リムルさんの活躍を見せてあげよう！」

リム姉が言葉を発してゐる間に、あたしの傷はみるみる内に治つていく。

心なしか、疲れてる体まで癒えてるような気もする。

魔法陣の光がどんどん強くなつていく。

「リム姉、一体なにを

「するの？」って言葉を発し終える前に、視界が暗転した。

（――――）

「うおつ!?」

視界が明けると、そこは見覚えのある場所。

ロングアーチの武装ヘリの内部に、あたしとギン姉はいた。

振り返ると、ヴァイスさんのびっくりした顔が見えたから間違いない。

「スバル!? お前、一体どうやつて……」

「その前に！ テイアは!?」

ヴァイスさんの疑問も最もだけど、まずは現状確認だ。

特に、分断されたティアの状況が気になる。

ヴァイスさんは呆気にとられていたが、不意に真面目な顔になると、状況を報告してくれた。

「ティアナは無事だ。現在は戦闘機人3名を保護。これからヘリに収容する所だ」

「そう……よかつた……」

ホツと一安心だ。

そういうえば……

「あれ？ リム姉は？」

リム姉の姿が見えない。

一体どこに行つたんだろう、と思つて周囲を見渡すと……いた。

つて!?

「ほい。ついでに回復しといたぜ。」

「いつのまに!?」

気づいた時にはティアと、ティアが無力化した戦闘機人3名を抱えて、リム姉があたしの後ろに立っていた。

リム姉は彼女達をゆっくり下ろすと、ティアの頭を撫でる。

「ティアナも、よく頑張つたな」

「え?……あれ?……リムル、お姉ちゃん?」

「おう。10年ぶりだな、ティアナ。ついでに言うと、お姉ちゃんじやなくてお兄ちゃんな」

驚いた。

なんと、リム姉はティアとも面識があつたらしい。

ティアは驚きすぎたのか、珍しく寝起きみたいなぼーっとした顔をしてた。

「誰?あの美人さん……」

ヴァイスさんがリム姉を指差して小声で聞いてきた。

その気持ちはあたしにもよくわかる。

なんとなくすごい人ってことは聞いてたけど、目の前で見ると手品にしか見えないも

ん。

「えーっと、あたしはリム姉って呼んでるんですけど、なんか昔に活躍したすごい人?ら

しいです」

「俺はリムル・テンペストと言う。ま、ただの嘱託魔道士だよ」

リム姉にはしつかりと聞こえてたらしい。

ヴァイスさんがちよつと気まずい顔してたけど、リム姉は気にしないで話を続ける。

「なんか聖王のゆりかごつてのが動いてて大変なんだろ？ちよつくら手伝いに行つてくれるわ」

「「え？」」

「んじや、また後でなー」

リム姉が消えた。

おそらく、ヘリに入つた時と同じように転移したのだろう。

ちよつとコンビニまで行つてくるくらいの気軽さで、リム姉は行つてしまつた。

それからヘリの中は騒然とする。

「ちよつ、マジか！嘱託魔道士とはいえ、一般人が気軽に行つていいい戦場じやねえぞ！」

「リム姉!?はやて部隊長とロングアーチに連絡しないと！」

「今やつてる！……ロングアーチ！こちらスターズ4！ゆりかごの元に、一人嘱託魔道士が向かいました！名前はリムル……リムル・テンペストです！」

~~~~~

S i d e : グリフィス

『名前はリムル……リムル・テンペストです!』

「こちらロングアーチ、了解です!・くつ、この忙しい時に!・ルキノ陸士、ゆりかご近辺に一般人が出現したら退避勧告をお願いします!」

「……」

「ルキノさん?」

どうしたのだろうか。

いつもはハツキリと返事をするルキノさんが、珍しく押し黙っている。

切羽詰まつた状況なので、こちらも大声で呼びかけるしかないか……

「ルキノさん!」

「……消えた……」

「え?」

「ゆりかご周辺の敵性体の反応が、全て消えました……!」「なんだつて!?」

一体、何が!?

騒然とするブリッジに、はやて部隊長から連絡が入った。

『ロングアーチ!…こちらはやてや。ゆりかご周辺のガジエット及び、ゆりかごの外部兵装全ての沈黙を確認。これから指揮を離れて突入します!』

「は、はやて部隊長! 一体何があつたんですか!?』

『うーん、正直冗談みたいな話なんやけど……地上の影のエースは化け物つて話やな』

~~~~~

S i d e : はやて

いや、ほんと。

自分の目で見ても、この光景は幻なんやないかって思つてしまふよ。

光の雨が降つたと思つたら、自分達の戦つてた相手が全て、一機残らず破壊されてたんやから。

それだけやない。

戦つてたウチら全員と、直下の地上を覆う程の大規模魔法陣。

それが展開されたと思つたら、戦いで傷付いてたみんなが、完全回復した。
正直、理解が追いつかない感じや。

だけど、幻じやないつて目の前の人人が証明してた。

「よつす。アンタがこの戦場の指揮官だろ？ とりあえず周りは黙らせといったから、デカ
ブツの中にいる人たちを助ける部隊を編成しといった方が良いかもよ？」

「アンタは、一体……」

「俺はリムル。しがない嘱託魔道士だ」

嘱託魔道士の、リムル？

あれ？……聞いたこと、あるような……

『数年前……一週間くらいウチにいた奴がいてなあ。くくつ……こいつがまたとんでも
ないのなんの』

記憶が脳裏にフラッシュバックする。

その時の、ゲンヤさんの言葉を思い出した。

『嘱託魔道士の試験で、当時力ミさんの上司だったオーバーSのゼストって人と模擬戦
して、試験会場ぶつ壊して引き分けになつたり――』
『嘱託魔道士なりたてで、でつかい闇組織を一人でぶつ潰したりな――』

聞いたときは、言つちや悪いけど作り話かな？って思つてたけど……

『そんな凄い人なら知つておきたいですねえ』

『気になるか?』

「ええ」

『ま、そりやそうだよな。ソイツの名前は、リムル。リムル・テンペストって奴だ。ウチの、もう一人の家族さ』

思い出した！

AAAの囑託魔道士、地上の影のエース、戦闘力で言えばオーバーS確実と言われた、リムル・テンペスト！

アンダガリムル・テンペスト

「お？ よく知つてゐな。そのリムルで合つてゐるぜ。俺はこの後行かなきやいけないとこ
があるから、この場はお前さんに任せるとよ」

え？ ちよつ……」

呼び止める間も無く、リムルさんは消えてしまつた。

「なんだつたんやろ……でもまあ、助けてくれたのはありがたいなあ……よし！ロングアーチ！こちらはやてや。ゆりかご周辺の——」

とりあえず、ヴィータとなのはちゃんの援護に行かなな！

／＼＼＼＼

S i d e : リムル

目的地まで転移をせずに高速移動する。

道中見つけたガジェットを『神之怒』^{（メギド）}で一掃しつつ、俺は管理局地上本部へ向かつて急行していた。

そこに、ゼストが向かつている事がわかつたからだ。
通信や各所のデータベースをハックして、ゼストにもう時間が無いのはわかつている。

だからこそ……ゼストに本意を聞きたい。

生きたいのであれば、俺なら生かせる筈だから。

／＼＼＼＼

周辺にいるガジェットを一掃した俺は、とうとうゼストの元へ転移した。

そこでは

「旦那あああああああ！」

ザンツ!!!

子供の悲鳴を背景に、ゼストが女性の騎士に斬られ、敗れる所だった。

一瞬激昂しそうになつたが……ゼストの顔に笑みが見えて、冷静になれた。
おそらくこれは、ゼストにとつて本望の結果なのだろう。

倒れるゼストを女性騎士が支え、先程悲鳴をあげたと思われる妖精のような小ささの
女の子が寄り添う。

ゼストは震える手で、自らの手の指輪型デバイスを女性騎士に差し出した。

「俺が知る限りの事件の真相が、ここに収めてある」

「お預かりします」

「アギトとルー・テシアのことを、頼めるか……巡り逢うべき相手に、巡り会えずにいた
……不幸な子供だ」

そつと、小さな女の子をゼストが撫でる。

「旦那あ……！」

「アギト……お前やルー・テシアと過ごした日々……存外、悪くなかった」

「……こいつは、このまま逝くつもりなのだろう。

なんとなくだけど、本人がそれを望んでいるのがわかつた。

だからこそ、一步を踏み出す。

「相変わらず勝手な野郎だな、ゼスト」

「お前は……リムル、か」

「ひとつだけお前に聞くぞ。俺はお前の身体を治す事ができる。完全にだ。お前は治療を受ける気はあるか？」

「つ……！」

アギトと呼ばれた小さな女の子が、希望を見出したかのように俺を見る。

俺は答えを聞くべく、まっすぐにゼストを見つめた。

「フツ……いや、やめておこう」

「旦那！」

「俺は汚れすぎた……その上で、騎士として誇りある最後をもらつたのだ……フツ……お

前に負けたままのは心残りだが……これ以上は、望まん」

「……そう、か……」

決心は固い、か。

馬鹿みたいに真っ直ぐで、自分勝手なこいつらしい。

「いい空だな」

「ああ」

「俺やレジアスが守りたかつた世界……お前達は、間違えずに進んでく……れ……」
ゼストの目が、閉じた。

「つ！ 旦那ああああああああああああああ！」

~~~~~

その後。

俺と、シグナムと名乗った女性騎士は室内にある遺体を丁寧に並べた。  
ゼストに、レジアス中将、中将を殺したらしき戦闘機人。

気絶していた秘書らしき女性には、軽く回復魔法をかけておいた。  
少しすれば直に目を覚ますだろう。

シグナムと俺は黙祷し、アギトはゼストにしがみついて泣いている。  
その中で最初に動いたのはシグナムだった。

彼女は解けていたリボンを手に髪をポニーテールに結び直すと、こちらに向き直る。

「私はこれから空に上がる。アギト、それにリムル。お前達はどうする」

先に反応したのは、意外にもアギトだった。

「アンタは……旦那を、殺した……つ、だけど！騎士として、誇りある最期をくれた……旦那はアンタに、アタシを託した。だから、アンタと行く。傍にいて、見極めてやる。アンタがもし、旦那の言葉を裏切るような真似をしたら……！」

「その時は、お前が私を焼き殺せ」

「……っ！」

シグナムがアギトに向けて手を差し出す。

アギトがその小さな手を叩きつけるように、シグナムに触れた。

「ユニゾン……イン！」

二人が光に包まれ、アギトの姿が消え、シグナムの見た目が変わる。

融合型デバイスのユニゾンを見たのは初めてだつたが、こうなるんだな。

「お前はどうする、リムル」

「もう少ししたら俺も空に上がる。今は……悪いけど、もう少しだけ旧友を見送らせてくれ」

「……そうか」

そのままシグナムを見送った俺は、死んだゼストに語りかける。

「ほんとに、満足して逝つたんだな……もう、魂が拡散してゐるや」

強い未練や怨念などがあると、肉体的に死んでいても、精神体がこの世に残り続ける事がある。

10年前にアリシアを蘇生できたのも、アリシアが母であるプレシアを置いていく事が未練となつて、精神体が少し残つていたからだ。

ゼストの場合は、そうならなかつた。

未練は無い、という事なのだろう。

「レジアスさんも、ゼストが逝つたのを見て成仏したみたいだし」

実は、ゼストが死ぬその時まで、レジアス中将は精神体の状態で残つていた。

ゼストに何か伝えたい事があつたように見えたが……

ゼストが死んで、その精神体に語りかけていたようなので、未練も晴れたのだろう。そんで最後に。

レジアス中将を殺害した戦闘機人の女性は、意外な事にまだ精神体が残つていた。

自分は道具という意識が強いようだから、生への執着とか少なそうなもんなのにな。

(まだ……まだ私は、死にたくない!!)

「もう諦めなよ。お前は死んだんだから」

(嘘、嘘よ！任務さえこなしていれば、自由を謳歌できたのに！好きなように生きられたのに！このまま消えるのは嫌……いやあ！)

うーん、思つたよりも未練たらたらだなコイツ。

消滅させるのは簡単だが……ちょっと寝覚めが悪くなりそうだ。

自由を謳歌するために任務を全うしてただけなら、ウチに引き入れても問題ないかもしない。

ざつと解析したところ、諜報活動に特化した戦闘機人だつたみたいだし、ソウエイの所に所属させてもいいかもな。

「あー、わかつた。俺の部下になるなら生かしてやつてもいいぜ？」

(なる！なります！だから、助けてえええ!!!)

よし。

言質はとつた。

早速俺は、戦闘機人の女性の死体を解析して無傷な状態のコピーを作り、横たわらせる。

それに、漂つてる女性の精神体を引っ掴んで突っ込んだ。

拡散しつつあつた魂も、完全に修復させている。  
程なくして……コピーした体が、動いた。

「目が開き、ゆっくりと上半身が起き上がるせて、呆然とした表情をする。

「い、生きてる……？」

「ああ。生き返らせたからな。俺の部下になるつて約束は覚えてるか？ドゥーエ」「つ…………は、はい」

よしよし。

ちゃんと術式は成功したみたいだな。

ドゥーエという名前にも違和感なく反応してゐるし。

(ちなみに名前は魂を解析して知った)

当の本人は、未だ信じられないのか手を握つたり開いたり、周囲を見渡して、自分の死体を見て悲鳴をあげていていた。

まあ、自分の死んでる姿なんて見たら普通びっくりするだろうけども。

「俺の勝手で死体を消す訳にはいかなかつたからな。お前さんの体のコピーを作つた。まあ、特に違和感無いだろ？」

「え、ええ……」

「さて。お前は一度死んだ身だ。この世界にいられないのはわかるな？」

「え、でも、私のＩＳなら……」

「それでも、ジエイル・スカリエツティだつたらお前を識別できる。違うか？」

「……そう、ですね」

「ま、そんな訳で、だ。お前さんには俺の世界に来てもらおうと思う」「……はい」

ちょっとだけ逡巡したようだが、納得くれたようだ。

それじゃ、とつとと済ませるとしようかね。

「よし。それじゃ、俺たち魔物の国へ1名ご案内つと」

「!…………これは!?」

『異世界への門』を開くと、ドゥーエは目を見開いた。

「ソウエイって奴のところに送るから、ドゥーエはそいつの部下になれ。んじゃ後でな」

「あ、ちょっと」

ドゥーエが何か言う前に、転送は完了した。

ついでに、魂の回廊経由でソウエイに思念通話を送つておく。

『ソウエイ。お前のところにドゥーエっていう変装の得意な奴送ったから部下にしてやつてくれ。よろしくな!』

『承知しました。リムル様』

よし、色々片付いた事だし……：

俺も空に上がつて、みんなを援護しますかね!

## 7話

そんなこんなで。

後にジエイル・スカリエツティ事件、もしくはJS事件と呼称される大規模事件は解決した。

機動六課……スバル、ティアナと、その仲間達が聖王のゆりかごの機能をある程度破壊、中にいた人たちを救出し、脱出。

その後、複数の次元航空戦艦で一斉攻撃、聖王のゆりかごは完全に消滅したそうだ。  
ん？俺？

俺は、地上で人に攻撃してガジエットをひたすら殲滅してたよ。

ま、すぐに全部停止したから、あんまり意味はなかつたかもしけないけど。  
そして、今は――

――――――

From : ミッドチルダ西部、エルセア、ランスター家

Side : テイーダ

大規模な事件が発生し、解決してから一週間。

今日は、久しぶりにティアナが帰つて来ていた。

現場に駆り出されてた為、その顔には若干の疲れを見せていたが……

ティアナが無事で、本当に良かつた。

俺も事務方として参戦していたからよくわかる。

あの事件で、ティアナがどれだけ危険な状況にいたのか。

「……………」  
「……………」

車椅子をティアナの元まで押し進めて、抱きしめる。

「本当に、無事でよかつた……」

「ちよつ!? 恥ずかしいってば、もう……」

そんな事言いながらも、ティアナは抵抗しない。

自然と、涙が溢れる。

今この手にあるのは、本当に守りたかったものだから……

「あー、お邪魔かな? それだつたら出直すけど」

唐突に、俺たち兄妹以外誰もいない筈の部屋に第三者の声が響く。

俺たちはバツと離れ、声の発生源を確認する。

そこには――

「よつ、ティーダ。久しぶり。ティアナは一週間ぶりだな」

「アンタは……え？ リムルさん！？」

「あつ！ リムルお姉ちゃん！？ あの後また姿を消して……探したんだよ！」

「すまんすまん」とか言いながら笑つてるリムルさん。

っていうか！

「え!? 来てたんですか⁈」

「おう、一週間前にな。ちよいとティアナ達を手伝つたんだ」

忘れもしない、10年前のあの日。

俺とティアナはこの人に助けられ、そして御守りを貰つた。

6年前の捜査で、死にかけた時に無くしてしまつたけど……

俺は、あの御守りがあつたからまだ生きているんだと思つてる。

だからこそ、俺は……

「リムルさん。あなたの事だから、きつと今回も助けてくれたんでしよう？ 本当に、ありがとうございます」

「よせつて。それに、今日は大した事してないよ。ティアナが頑張ったんだ。それに、  
ティーダも、な」

リムルさんは柔らかく微笑んで、俺の頭を撫でる。  
はは……この人には、ほんと頭が上がらないな。

バシャツ

とか思つてたら、いきなり水を掛けられた。

「? 一体、何を…………!?」

怒鳴るよりも先に、自分に起きている変化がわかつた。

これは……

「足が…………治つた!?」

「ドッキリ成功つてね。お前達に渡した御守りにも入つてた、俺特製フルポーションだ。  
よく効くだろ？」

言葉が出ない。

6年もの間まったく動かなかつた足が、まさか動くようになるなんて…………！

恐る恐る、近くのテーブルを支えにして、車椅子からゆっくり立ち上がる。  
立ち上がる事が、できた。

「た、立つた……お兄ちゃんが、立つた……！」

ティアナが感極まつたように声を上げる。

リムルさんがドヤ顔しているが、それも気にならない。

俺はティアナを抱き締めて、声にならない声を上げて泣いた。

／＼＼＼＼

S i d e : リムル

うんうん。

兄妹の仲が良いのは良きことかな。

ちよつと良過ぎる気もするけど、そこはまあスルーでいいだろう。

しかし……

昔俺の渡していた御守りオモチャが無くなつてゐるということは、ティーダは本当に死に掛けた  
ようだ。

俺はそつと後悔した。

そんな事になつてゐるのは知らなかつたとはいゝ、下手したら友達が一人死んでたかも  
しないのだ。

俺は決心する。

次に渡す御守りには通信機能を入れようと。

さて、と。

手を叩き、二人の注意をこつちに向ける。

「はい二一人とも。喜んでるところ悪いんだけど、これからお出掛けだ。付いてきてくれ」「はい?」

~~~~~

F r o m : ミツドチルダ、ナカジマ家

あれから二人を強引に連れ出し、行つた先はナカジマ家だ。

ランスター家から意外と近かつたし、ティアナはスバルと仲が良い。

紹介しておくに越した事はないと判断したので、顔見せのついでに連れて行こうと思つた次第である。

インターほんを鳴らす。

ピンポーン

『はいはーい、どちら様で……あーリムルちゃん!』
「ゞ)無沙汰です、クイントさん』

~~~~~

「もう、早く顔見せに来なさいよ!スバルに話を聞いてから、いつ来るのかなーって待つてたんだから!」

「あはは……すいません。スバルに会つてから、諸用でまた国に帰つてたんで  
クイントさんに怒られるが、これは仕方ない。

俺も、まさか10年も経つてゐるとは思つてなかつたんだし。

「アタシ達、結構近所だつたのね……」

「ほんとにねー。あ、お母さん、ギン姉。前にも話したけど紹介するね。こつちがあたし  
とコンビ組んでるティア。あちらは、ティアのお兄さん」

「ティアナ・ランスターです。通話したことはあつたけど、直接会うのは初めてですね。  
よろしくお願ひします、クイントさん』

「ティーダ・ランスターです。妹がいつもお世話になつてます』

「いえいえ、こちらこそ。ウチのスバルがお世話になつてます。ティアナちゃんも、いつ

「ありがとね。スバル、結構やんちやでしょ?」

「あはは……まあ……」

「ちょっとお母さん?! テイアも目を逸らさないでよ!」

「コホン……ギンガ・ナカジマです。よろしくお願ひします。ティアナさんは久しぶりですね」

「お久しぶりです、ギンガさん。あの後は大丈夫でしたか?」

「ええ、おかげまで。あの時は、六課のみなさんに助けられました。ありがとうございます」

「いえいえ。結局、ギンガさんを助けたのはスバルですし」

各人、和やかに自己紹介を終える。

いやはや、スバルとティアナのお陰でティーダやギンガ、クイントさんもすっかり馴染んでるし、連れて来た甲斐あつたな。

それにもしても、少し気になる事がある。

「クイントさん。身体に不調が見られるんですけど、もしかして……」

「ああ、これは8年前にちょっとね。失敗しちゃったの。その時にリムルちゃんに貰つたイヤリングも無くしちやつたんだ……ごめんね」

そう言つてクイントさんは目を伏せる。

クイントさんも死にかけたのか……

俺は無言で、魔法陣を展開する事にした。

「リムルちゃん……？　これは……」

「唐突ですみません。クインントさんを治す為に回復魔法をかけました。前線復帰するかはクインントさん次第ですが、これで昔と同じように動けますよ」

「……！」

クインントさんは、ガバッと俺を抱き締める。

「ありがとう……本当、感謝してもしきれないわ……」

その瞳には涙が浮かんでいたように見えるが、そこは何もせず抱き締め返すのが良いだろう。

喜んでる人に水を差すのも、なんだしな。

後ろでティーダが「俺の時は水をぶつかれたのに……」とか言つてるけど無視だ。  
イタズラ相手は選ぶのが俺の流儀である。

（～～～～）

場が落ち着いたので、かねてより決めていた事を実行しようと思う。  
「さて……スバル、ギンガ。俺の渡したペンドント、壊れてるだろ？」

「ぎくつ」

「あ、はい……すみません、壊しちやつて」

「いいよいいよ。壊れたつて事は、その役目を果たしたつて事なんだろうし。まだ持つてるのなら、ちよつと貸してくれないか?」

スバルとギンガの二人はお互に顔を見合せると、こちらにペンダントの残骸を渡してくれた。

俺はそれを受け取り、状態を確認する。

ガラス部分が無くなつてるのは当然として、金属フレーム部分もちよつと歪んでるな

……

懐からフルボーション入りガラス部分を取り出し、ペンダントに嵌める。

歪んだ金属フレーム部分は魔法で修理した。

「よし、できた!返すよ」

「わあ……新品みたいに直つてる!」

「ありがとうございます、リムルさん!」

うんうん。

喜んでくれたみたいで何よりだ。

さて、そこで物欲しそうにしてる子たちにも何かしてあげないとな。

「クインントさん、ティーダ、ティアナ。君達には、これらを渡しておこうかと思う。皆、好きな物を持つて行つてくれ」

そう言つて取り出したのは、いくつかのアクセサリ。

もちろん、フルポーション入りの御守りである。

みんな怪訝な顔をしながらも受け取つてくれた。

クインントさんとティアナはイヤリング、ティーダは指輪を選んだようだ。

「リムルお姉ちゃん、これは？」

「ああ、昔渡した御守り、みんな無くしちやつただろ？だから、新しいのを渡しておこうと思つてな」

「そういえば、この中にはフルポーション？つてのが入つてるんでしたつけ」

「うん。何かあつたときには割れて助けてくれると思う」

ティーダはランスター家での俺の言葉を覚えてたらしい。

「フルポーション？なんだか、ゲームみたいなお話ね」

クインントさんは「フルポーション」という単語に對して疑問を持つたようだ。

「我が国特産のフルポーション！名前の通りの回復薬で、飲んでよし、かけてよしの優れものです」

ふふんとドヤ顔をする。

得意になつていると、スバルがおずおずと手をあげる。

「あの、リム姉？リム姉の出身つて第97管理外世界『地球』じやなかつたつけ？この前行つた時、そんなの無かつた氣がするんだけど……魔法が使えるのは、なのはさんやはやて部隊長の事があるからわかるんだけどさ」「……」

「……スバルは行つた事あるのか……」

であれば、まあもつともな疑問である。

正直な事を言つてもいいかもしねないが……

それで嘱託魔道士の資格が剥奪されたりしたら面倒だしな。

「地球出身で合つてるよ。ただ、地球にもいろいろあつてな。俺の国はあんまり認知されてないんだよ。だから、ポーションの類もあんまり出回つてないって訳」

地球と繋がりの強い世界なのは間違つてはないので、ちよつと強引だけどこれで通す事にした。

スバルも「へー、そなんだ」と納得してくれたようだ。

「いやいやいや、地球つてそんな技術あるの！お兄ちゃんの足を一瞬で治すとか、ミツドにも無いレベルの技術なんですかど！？」

「まあまあ。地球つて言つても広いからさ。そう言う事もあるつて

「ええ……」

ティアナは納得できなかつたようだが、強引に丸め込んだ。

そんな中、気を取り直すかのようく、クイントさんが声を掛ける。

「さて。もういい時間だし、皆ウチで夕飯食べていいかない？」

お。

これ以上言及されても面倒だつたし、その提案はありがたい。

俺も乗るとしようかね。

「そう言う事でしたら、俺も料理手伝いますよ」

「えっ！リム姉、ほん作つてくれるの？やつたーーー！」

「リムルさんのご飯……また食べられるなんて、嬉しいなあ……」

俺が作ると言つた瞬間、大食い姉妹がはしやぎ出す。

それに対し、ティアナとティーダは揃つて首を傾げている。

「リムルお姉ちゃんつて、料理できたの？」

「ティア知らないの！？リム姉の作つてくれるご飯、ものすつごく美味しいんだよー！」

「おいおい、ハードル上げるなよ……ま、本当の所は食べてみればわかるさ」

シエルさんの作る料理だから、絶対外れないだろうけどな！

その後。

俺（というかシエルさん）の料理を食べて驚くランスター兄妹と、それに構わずおか

わりしまくる大食い3人を相手に料理で忙殺される俺の姿があつたとか、なかつたとか。

「「「おかわりっ！」」」

～～～～～

結局、あの後のクインントさんの「折角だし泊まっていきなさい」という一声で、俺とティーダ、ティアナはナカジマ家に泊まる事になつた。

今は、ギンガとスバルがランスター兄妹を部屋に案内している最中である。頃良くなきんと二人きりになれたので、今日の目的を果たす事にした。

「クインントさん。俺、ゼストの最期に立ち会いました」

「……話には聞いてたよ。……隊長は、何か言つてた……？」

「……「俺やレジアスが守りたかつた世界……お前達は、間違えずに進んでくれ」……と」「そう……フフツ、隊長らしい、な……」

「ええ。俺が最初に会つた時と変わらず、自分勝手で、馬鹿みたいに真つ直ぐな……アイツのままでした」

そう俺が告げると、クインントさんは数秒間目を閉じ、深呼吸をした。

「リムルちゃん」

「はい」

「隊長の死に目を見届けてくれた事、ゼスト隊の生き残りとして……感謝します」

そう言つて、クイントさんは深々と頭を下げた。

「……はい。俺も、アЙツの……誇りある騎士の最期に立ち会えた事、光栄に思います」

（～～～～）

それから暫くは、俺はナカジマ家に泊まる事になつた。

以前泊まつた時と同じように家事の手伝いをしたり、クイントさんと俺でゼストやゼスト隊の皆さんの墓参りに行つたり。

その間、ティアナとティーダはちょくちょくナカジマ家に訪問している。

ゲンヤさんの「どうせだつたらウチに住まないか?」という言葉には、二人とも本気で悩んでるようだつたが……

二人がどういう決断をするのか、俺は見守ろうと思う。  
さて……他の所用も、さつさと済ませてしまおうかね。

～～～～

ある日。

無人世界にて拘束されていたジエイル・スカリエッティと、一部の戦闘機人が唐突に白髪化、発狂するという事件が発生する。

原因は不明。

カメラには何も映つておらず、これが外部犯なのか、それともスカリエッティの用意した何かの策なのかも定かではない。

本人達はそれ以来何かしらの譴言をずっと呟くようになつたが、正気では無いと判断された為放置された。

かねてより懸念されていた戦闘機人達の「スカリエッティ化」も特に発生せず、捜査を担当する局員は頭を悩ませる事になる。

「ああ素晴らしい素晴らしいこれが真の美かそして真の恐怖がああ惜しいこれを伝えられない私の糧にできない惜しい惜しい素晴らしい素晴らしいああ美しい素晴らしい」

# 8話

From：ミツドチルダ中央区画

機動六課解散翌日。

スバルとティアナに手を引かれ、なんか軍の施設っぽい所に連れられる。

二人が所属してた機動六課は昨日時点で解散した筈だが、俺なんかを連れ込んでやつて良いのかな？

やつて来たそこには、年若い少年少女達がいた。

大人もいるが、それでも20代前半といつた見た目だ。

この前の事件で見かけた人達も何人かいるので、この子達がスバルの仕事仲間なんだろう。

顔を知らない子達は怪訝そうな顔をしているが、ズバツとスバルが切り出す。

「皆さん、紹介します！こちらが、この前のJ.S事件で手伝つてもらつたりム姉です！」  
「俺は男なんだけどな……ゴホン、あー、俺はリムルと言う。ここにいるスバルとティア

ナの昔馴染みみたいなもんだ。よろしくな」

「あの時はあんまり話できなかつたけど、随分別嬢さんなんやなあ。10年前に活躍した凄腕の嘱託魔導師、地上の影のエース。リムル・テンペストって、アンタの事だつたんやな」

最初に反応したのは、この部隊で一番高い階級章を付けた、この前ゆりかご前で出会つた女の子だつた。

「よくそんな前の事を知つてるな」

「リムルさんの事は、今でも管理局の語り草になつてますから」

「うへえ……」

「あたしはこここの部隊長やらせてもらつてた、八神はやてつて言います。2度目ですけど、お会いできて光栄ですわ。リムルさん」

はやては部隊長をやつてるだけあつて、出来る女の貫禄を持つっていた。

魔導師としての実力もかなり高そうに見える。

次に反応したのは、茶色の髪をサイドテールにした年長組の女の子だ。

「そうなんですか!? 私は元スターズ分隊隊長の高町なのはつて言います。リムルさん、もし良かつたら是非私たちと模擬戦しませんか!」

「あー……気が向けばな?」

随分と向上意欲の高い子みたいだな、なのはは。

相手にするとちょっと面倒なタイプな感じがしたので、次に移る。

「私はフェイト・T・ハラオウンです。元ライトニング分隊隊長です」

こんな感じで、サクサクっと各自自己紹介をした。

最後は、シグナムがこつちに一步踏み出してくる。

「以前にも自己紹介をしたが、私は元ライトニング分隊副隊長のシグナムと言う。私もらも是非、模擬戦をお願いしたい。ゼストに打ち勝つたという貴方と手合わせ出来るのは非常にありがたいからな」

シグナムは最初に会った時と変わらず、凛とした風格を持ち合わせていた。

「ああ、アンタか。あの時の事は感謝している。嫌な役目をさせちゃって悪かつたな」

「いや……私も武人だ。誇りある騎士として、彼の最期に立ち会えたのは嬉しく思う」「そつか」

こういうのは、いつまで経っても慣れないな。

逝つたゼストの事を思い浮かべる。

最期の最期まで、自分勝手な奴だつたが……シグナムの言う通り、誇りある騎士として最期を迎えたんだと思う。

俺は、自分の頬をバチン！と叩く。

!

「感謝する！」

{ } { }

Side:スバル

この日。

初めて、リム姉の強さを知った。

けど……

相対すると、その理不尽さがよくわかる。

戦闘開始直後、宙に浮かぶリム姉を見て……あたしはギョッとした。たぶんだけど、機動六課の全員が同じ気持ちだつたんじやないかな？

砲撃魔法の大規模展開。

おそらくは、1発1発が、なのはさんのデイバインバスターに匹敵する威力。それが、リム姉を中心にして100以上は展開されていたのだから。

それからは、阿鼻叫喚だつた。

間断なく降つてくる砲撃を、みんな必死になつて避ける。

ヴィータさんからは、「防御しようなんて考えるなよ？そんな事すれば、固まつた所を狙い撃ちだ！」と指示されたが、そんなの言われるまでも無かつた。

全力でガードすれば、2～3発は耐えられるだろうけど……おそらく、一度足を止めたら数十発の魔力弾が襲つてくるつて直感的にわかつたから。

それにしても、隊長陣は流石だ。

あの砲撃を搔い潜りつつ、各々が攻撃を開始している。

けれども……

シグナムさんや、ヴィータさん、フエイトさんが接近するや否や、リム姉は武器も持たない手足で迫るフォワード陣を吹き飛ばした。

さらに、吹き飛ばした直後は砲撃魔法の連射で追い討ちしてゐる。

その隙に、センターガードのなのはさんはやて部隊長が遠距離砲撃を撃つてたけど

……

「嘘つ!?」

どういつた手品なのか……砲撃はリム姉の手前で軌道を180度変えて、なのはさんはやて部隊長に襲いかかつてた。

しかも、この間あたし達への攻撃は一切緩んでない。

一人、また一人と撃墜され……最後は、なのはさんとはやて部隊長、リム姉の集束砲撃魔力のぶつかり合いで模擬戦は終了した。

更地になつた訓練場で、最後に立つていたのがリム姉ただ一人だつたのは、もはや冗談なんじやないかと笑わざにはいられなかつたよ……

（～～～～）

模擬戦終了！

「いやー、みんな結構鍛えてるじやん。良い部隊だな、はやて！」

「いやいやいや、一人で全滅させた本人がそういうこと言います!?」

なんだなんだ。

褒めてるのに、素直に受け取らないのは失礼だぞ?。

「あはは……まさか二人分のブレイカーを相殺されるとは思いませんでした……はあ」

「私たちも……攻撃全部、いなされちゃつた……」

なのはとフェイトが沈んでいるが、別に落ち込むことはないと思う。

充分に強かつたと思うよ、マジで。

ほんと、よくあそこまで保つたものだ。

「私も、まだまだ剣の腕を磨かなくてはな……次こそは一太刀、届かせてみせる」「あたしのグラーフアイゼンも、今度は踏み台になんてさせないぜ」

シグナムとヴィータは、リベンジに燃えている。

やる気があつて結構な事だ。

「あたし達は、避けるので精一杯でした……あはは……」

「いや、おかしくないですか!? デバイスも使わないで、なんであの数の砲撃を制御出来るんですか! 最後にはブレイカーまで撃つてたし! 理不尽だあ……」

スバルは茫然自失してつぽい。

ティアナはヤケになつたのか、俺の理不尽さに対しプリプリと怒っている。  
「これが、地上の影のエース……戦闘力は確実にオーバーSと言われてるリムルさんの実力……」

「うう、なにもできませんでしたあ……」

「きゆくるー……」

年少組とフリードは呆然としたり、無力さを嘆いていたり。

そんなこんなで、今回の模擬戦は終了したのであつた。

{ { { { {

Side:リムル

「そういえばさ。フエイトにちょっと聞きたい事があるんだよ」

「はい、あの……どうしました?」

「うーん……もしかしてなんだけどさ。 フェイトのミドルネームのTつてテスタロツサだつたりしない？」

「え？……あ、  
なるほど。  
はい。その通りです」

名前を聞いて得心がいった。

そりや似る訳だよな

良い土産話が出来て口元がニヤけるのを自覚しつつ、俺はフエイトの耳元に近づいて言葉を紡いだ。

「そつか……プレシアとアリシアは、今は元気でやつてるぜ？」

「え……？」

フエイトが呆けた顔をし、なのはとはやてがピクッと反応したのに対し、俺はさつと身を翻した。

「じゃ、またな！機動六課の諸君！」

「ちょつ……リム姉!?」

「リムルお姉ちゃん!?」

「スバルとティアナも元気でな！」

スバルとティアナが呼びかけてくるが構わず『異世界への門』<sup>ディファレントゲート</sup>を開く。機動六課の面々が驚いた顔をしているが、この際無視だ。

「待つてください——！」

フェイイトが焦ったように叫ぶ。

だが、いきなり会わせてても、おそらくプレシアは心の整理ができないだろう。会わせられるまでには、もう少し時間が必要だと俺は判断した。

「悪いな、フエイト。今はまだ、会わせられる時期じやないんだ。今度ウチの国に招待するから、その時にでも会つて話をしてやつてくれ」

最後にそう言い残し、魔法陣の光が強くなるのと共に俺はこの世界を後にした。

「えつ？えつ？リムルさん、あんた一体何者なんや——！」

俺が居なくなつたその場には、はやての本気の叫びが響いていた――

／＼＼＼＼

それから暫くの間、フェイトを中心としてリムルの捜索が行われたが、成果は出なかつた。

第97管理外世界『地球』出身との情報から、現地の協力者、アリサ・バニングスと月村すずかの協力の元、捜索しても結果は出ず。

結局、リムルの地球出身という話は嘘だつたんじゃないかという結論になつて、捜索は終了したのであつた。

＼＼＼＼＼

From : 『魔国連邦』、<sup>テンペスト</sup>  
迷宮内、研究所

「クフフフ。おかえりなさいませ、リムル様」  
「おう、ディアブロ。出迎えご苦労さん」

優雅に目の前の執事が一礼する。

こいつはディアブロ。

俺の配下の中でトップクラスの実力を持つ、悪魔だ。

「プレシアはいるか？」

「プレシア殿でしたら、いつもの場所にて作業中でございます」

「そつか。あんがと」

「クフフフ。もつたいなきお言葉です」

いつもの場所つていうと、魔導具開発の研究所だな。

プレシアにはそこで魔石に代わる高密度エネルギー体の開発研究を行つてもらつて  
いる。

本人が言うには、迷宮内は特段に魔素濃度が高く、また竜種であるヴエルドラの協力ダンジョン

も得られるので、案外さしたる時間もかけずに開発は成功するであろうとの事。

話が少し逸れてしまつたが、今日はそんな活躍をしているプレシアに話があるのだ。  
お、プレシア発見。

「よつす、プレシア。今ちよつと時間いいか？」

「あつ、リムル陛下！はい、今でしたら大丈夫です」

そう言つて微笑むプレシア。

30代と言つても信じられそうな見た目の彼女は、実は60代だつたりする。

最初に会つた時と比べて、随分と若返つたモノだ。

俺は病氣に蝕まれてた身体を治してフルボーションを飲ませただけなのだが……

今ではお肌ツヤツヤ、シワもほとんど見えない、若奥様状態になつていた。

何があつてそうなつたのかは不明だが、女性とは不思議なものだなあとしみじみ思う。

おつと、また話が逸れた。

さて、本題に入るとしようか。

「ミッドチルダでフェイトに会つたよ」

「！……それで、あの子はどうしてましたか……？」

プレシアの声が震える。

「幸せそうにしてた。今では大切な家族がいるつて」

「……そう、ですか。……よかつた……」

おそらくだが、プレシアはフェイトに対して負い目を感じている。

過去の記録を見た限りだと虐待のような事もしてたみたいだし、仕方ないだろうが

……

それでも、切り込む事にした。

「俺はそのうち、フェイト達をこの国へ招待しようかと思つてゐる」

「!!……そ、それは……」

「悪いけど、これは決定事項だ。その上で、プレシアに聞くぞ。お前はあの子に会う気はあるか？」

プレシアは押し黙つてしまつた。

本人に会つて謝りたい気持ちと、そんな事をしてもただの自己満足なんじやないかと  
いう気持ちがせめぎ合つてゐるように見える。

「申し訳ありません、陛下……少し、考えさせてください……」  
か細く、頼りない声で、彼女が返事をした。

俺はそれに頷くと、軽くプレシアの肩に手を置く。

「うん、じつくり考えてくれ。ま、俺の予想だと、会つてもそんなに悪い事にはならない  
と思うよ？ 気楽に考えてこようぜ」

「フフ……陛下の仰る事なら、本当にそうなりそうですわね。……ありがとうございま  
す、リムル陛下」

「おう」

俺はニシシと笑つて、その場を後にした。

{ { { { {

「あー！ リムル、今までどこ行つてたのよさ！」

「そうだと、リムルよ。折角我らで”デバイス”とやらを作つてみたのに、見せびらかす事ができないではないか！」

プレシアの研究所を出ると、早速やかましいのに捕まつた。

妖精王女で俺と同じ魔王のラミリスと、竜種で俺の友達のヴエルドラだ。  
というか、気になる単語が聞こえたような……

「ん？・デバイス作つたつて……マジで？」

—クアハハハ！驚くがいい、リムルよ！

「アタシと師匠の技術の真髓を！」

ニセーット・アーッブ! [

カツと二人が光に包まる。

なんと、目の前には服装の変わった二人がいた。

ヴエルドラは黒騎士然とした格好になり、ラミリスは魔法少女っぽいようなファンシーな格好になつた（元々ファンシーな感じだけど）。

その服装の効果は、耐衝撃、対魔法と、立派な防護服になっていた。

「おお、バリアジャケットを再現したのか！それで、デバイスには他にどんな魔法を登録してるんだ？」

「クアハハハ、もちろん用意してあるとも」

「見ててよね！ミラージュハイド！」

言葉と共に、ラミリスの姿が消える。

「クアハハハ！ラウンドシールド！」

ヴエルドラが目の前に光の盾を出す。

解析してみたが、驚くことに本当にデバイスが全て自動で処理を行っているらしい。この仕組みは……

「なるほど。刻印魔法を使つてるんだな。薄い魔鋼のプレートに刻印して、複数枚をデバイスの中に入れてるのか」

「もう見破るか。流石だな、リムルよ」

「まあ、これくらいのサイズのデバイスだと、5枚くらい入れるのが精々なんだけどね」ふむふむ。

プログラミング言語といった高度な文明の無い中では及第点といった所か。

「今後の課題は、魔鋼プレートの小型化と刻印魔法の自由な書き換えって所かな？」

「うむ。しかし……自由度で言つたらやはりリムルの真言変換魔法の方がやはり高い」「そなんだよねー。アナグラムマジック真言変換魔法は発動までにイメージしなきやいけないから、速さで言つたらデバイスなんだけど、デバイスは魔法の数を増やしたい場合どうしても大型のを作る必要があるのよね」

そう……今の課題は正にそこなのだ。

「となると、今後は刻印魔法の書き方も変えていく必要があるな。たとえば、魔法を立体的に刻印して、その中に複数の魔法を持たせたりしたらどうだ?」

「なるほど! それで魔力を通す場所によつては使える魔法が変わつたり

「クアハハハ! その仕組みであれば我にもわかるぞ! 後は魔鋼をそのように加工する技術が必要だな」

「ふむ。それだつたら、こんなやり方はどうだ?」

などなど……どんどん議論を進めていく。

議論の途中でシユナに捕まつて仕事に向かつたりもするが、まあ概ねいつもどおりだ。

こうして、《魔国連邦》テンペストでの日々も過ぎていく。

向こうの連中ともそんなに時間をかけずに再会するだろう。

フェイトには悪い事をしたが、もう少し待つてほしいと思う。

ミッドチルダ

俺だつて、懷いてくれる子供達にまた会いたいしな。  
「ま。また今度つて事で――またな」

# 幕間 『魔国連邦』での1日

S i d e : アリシア

こんにちわ！

あたしはアリシア・テスター・ロツサ。

今は8歳で、テンペスト人材育成学園の初等科2年生。

『魔国連邦』幹部のテスター・ロツサ様と同じ名前で、間違えると大変なので皆からは「アリシア」って呼んでもらつてます。

得意科目は算数と魔法で、苦手なのは国語かな。

算数と魔法はママ譲りの才能（つてママが言つてた）でなんとかなるんだけど……言葉が以前住んでた所と違うので、国語は苦手。

最初の1年はママと一緒に学園で学んでました。

前住んでた所？

うーん、あたしはあんまり覚えてないんだけど、ミッドチルダっていう、ここことは違う世界だつたらしいよ？

物心ついた時には、《魔国連邦》(テンペスト)にいたから、どんな所だつたのかよく知らないんだ。アタシが5歳の時にママと一緒にこつちに引つ越してきたらしいんだけどね。リムル陛下に誘われてこつちに来たんだってー。

フツフツフ、驚いた？

そう！

なんと、あたしとママはリムル陛下にお誘いいただいたのです！  
まあ、あたしは覚えてないんだけどね。てへへ。

さて、今日はそんなあたしの1日を紹介しちゃいます！

まず、朝はママと一緒に起きるの。

それで、洗面所で顔を洗つて、歯磨きをして、それから朝ごはんの準備。

あたしはお皿とかコップとか出して、ママが魔石コンロでお湯沸かしてお茶を入れたり、パンを焼いたりするの。

あたしが好きなのは、ルベリオス産の麦を使つたパンに、牛鹿(うじか)の燻製を薄く切つたのと、目玉焼きをのせたやつ！

他の家だと、朝は絶対魔黒米(まこくまい)！ってところもあるんだけど、あたしの家はパン派なんだー。

朝ごはんを食べたら、ママとあたしはお出かけの準備をするの。

あたしは学園に行くから教科書とかを用意して、ママはお仕事の準備。

ママのお仕事？

えっとね、たしか“魔導具研究所”って所でいろんなの作ってるんだって。

作ってるものは、“しゅひぎむ”？っていうのがあるから言えないらしくって、あたしは聞いてないんだけどね。

でも、あたし達の暮らしをもつともつと便利にするためのお仕事してるって言つてたから、きっとすごい事やつてるんだよ！

いつつも優しいし、自慢のママなんだ。

それでね。

あたしは学園へ向かって、ママはお仕事に迷宮に行きます！

迷宮ダンジョンつて何かつて？

フツフツフ、よく聞いてくれました！

『魔国連邦』名物の迷宮ダンジョンは、誰一人として最下層までクリアした事のないと言われているの。

文字通りの迷宮で、中は複雑な迷路！

そして、10階層毎にはそこを守る階層主フロアボスが襲つてくるよ！

冒險者の人たちは、ここで魔物の素材や、宝箱に入ってるお宝とかを手にいれてお金  
を稼ぐんだって。

え？

とつても危ない場所？

そんな事ないよー。

ほら、迷宮の入り口の所で腕輪売ってるでしょ？

あれは『復活の腕輪』って言ってね。

あれをちゃんと装備してると、迷宮ダンジョンの中で死んじやつても生き返れるんだって。

でも、迷宮ダンジョンの外では効果がないから、絶対に外で試しちゃダメだよ？

リムル陛下のお友達の、魔王ラミリス様の力が届く場所じやないとダメだつて、学園  
で習つたもん。

ラミリス様はどんな人かつて？

えつとね、お母さんの上司？だからあたしもちよつと会つた事あるんだけどね。  
ちつちやくてかわいいの！

ケーキが大好きで、いつも飛んでて、元気いっぱい！

妖精女王様つてだけあつて、妖精や精霊、ドライアスの人達もとつても尊敬してる。  
そんでね、すつごく頭いいんだって。

しかも迷宮を作ったのもラミリス様だし、さすがリムル陛下のお友達だよねー。  
あ、話がずれちゃったね。

なになに？

ママはなんでそんな所に仕事に行くのかつて？

えつとね、迷宮の中にも街とか、研究所があつてね。

街は、なんか偉い人とかが泊まる場所なの。

とつてもいい所つて聞いたんだけど、どんな所かはわかんない。  
いつか行つてみたいよねー。

で、ママは研究所に行くの。

迷宮ダンジョンの研究所は、大事な研究とかをする場所なんだつて。

“こつかきみつ”になるから、どんな事してるのかは内緒だつて言つてたけどね。  
さてと。

次は学園だね。

さつきも言つたけど、あたしの行つてる学園は“テンペスト人材育成学園”つて言う

の。  
《魔国連邦》テンペスト

の子供は大体ここに入るんだよ。  
すつごく小さい子とかはさすがにいないけど。

あとは、大人の人たちもいっぱいいるね。

国語や算数ができないと仕事ができない事があるから、みんな一生懸命勉強してゐるの。

あたしも国語が苦手だから、大人になつた時のお仕事とかちよつと心配……  
うん！きつとなんとかなる！がんばるもん！

褒めてくれるの？

えへへ、なんかうれしいな。

うん、がんばるよ！

あ、そうそう。

学園では国語や算数だけじゃなくつて、音楽や美術、図工なんかもやるんだ。  
ここで音楽の才能を見つけて音楽家になる人とかもいるんだよ？  
すごいよねー。

あとはね、魔法と戦闘訓練とかもあるの。  
あたし、魔法は得意なんだー。

いつつも成績で花丸！

でも、戦闘訓練はちょっと苦手。

すぐにへとへとになっちゃうんだよね……

いいもん。

将来は冒険者じゃなくつて、ママみたいな研究者になるつもりだし！ ん？

見かける人たちで人間が思つたよりも少ない？

そりやそうだよー。

だつてここは『魔國連邦』<sup>テンペスト</sup>。

元々は、魔王リムル陛下の作つた魔物の街なんだから。  
え？

魔物ばっかりで怖くないのかつて？

大丈夫だよ。

みんな優しいもん。

隣の家のゴブリナの口口ナちゃんはあたしの親友だし、向かいの家のハイオーラの  
キーゴくんは頼りになるし。

学園でも友達いっぱいいるんだよ。

楽しそう？

うん、楽しいよ！

もし、学園に入る事があつたら、あたしが案内してあげる！

お昼ご飯もおいしいしね。

あ、そうそう。

ウチの学園では、給食制度つてのがあるの。

お昼ご飯を学園が用意してくれてね。

午前にいっぱい勉強した後に食べる給食はとつても美味しいんだ。  
たまーにシユナ様が作りに来てくれる事もあって、その時はみんなでお祭り騒ぎになつたりして。

あと、ほんつとーにたまにしか食べられないけど、ハクロウ様の握つてくれる『お寿司』っていう料理も大好きだよ。

海のお魚を生のままで、ご飯と一緒に食べるんだけどね。  
とつてもおいしいの！

いつもはパン派だけど、お寿司の時だけはあたしも『ご飯派になるんだ』。  
給食を食べたらお昼休み。

この時は仲のいい子たちとかと一緒に遊ぶの。

最近だと、魔力お手玉とか、魔力キヤツチボールとかしてるよ。  
え？

危ない？

そんなことないよー。

当たつてもちよつと痛いくらいだもん。

あ、信じてないなー。

それじゃ試してみよ？

えいやー！

……

ほらね？

全然痛くないでしょ？

え？ 痛くはないけど、いきなりでびっくりした？

あ、あはは……ご、ごめんなさい……

……

えーと、気を取り直して！

お昼休みの後は、また授業があります。

午前中が必須科目で大体みんな同じ授業を受けるんだけど、午後は選択式なの。自分の好きな事を授業で学べってリムル陛下が言つたからこうなつたんだって。あたしはママみたいな研究者を目指してるから、魔導工学をやつてるよ。

魔鋼に刻印魔法を付与したり、どんな物に魔力が通るのか、通らないのかとか実験し

たりするんだ。

よく、難しそうって言われるけど、最初からやつてみるとそうでもないんだよ？興味があつたらやつてみてね！

それで、午後の授業が終わつたら帰ります！

友達と遊んだりとかもするけど、あたしはあんまり遅くまでは遊ばないかな。ママが帰つて来るまでにおつかい済ませなきやいけないもの。

帰り道でお野菜とかパンとか、ママの書いたメモどおりに買い物して、お家に直行！それでね、外が暗くなり始めたくらいにママが帰つて来るから、夕食の準備を手伝う

の。

その後は、ママと一緒にご飯食べて、お風呂に入つて、歯磨きして。

最後にママと一緒にベッドに入つて、一緒に寝るの。

＼＼＼＼＼

一通りの話を終えて、元気よくアリシアが振り返つた。

「はい、あたしの1日はこんな感じです！どうでした？フエイトお姉ちゃん！」

「うん。元気一杯で良い子だね、アリシアちゃんは。とっても良いお話を聞けました、あり

がとうね」

フェイトは優しげな笑みでアリシアを見つめて、その話に聞き入っていた。

「この後ママの所に差し入れ持つて行つてやれつてリムル陛下にこれもらつたんだけど、フェイトお姉ちゃんも一緒に来る？」

そう言つてアリシアがケーキの入つたバスケットを掲げた。  
対し、フェイトは迷つたような仕草をしている。

「えつと……いいの？」

「うん！リムル陛下が「フェイトも一緒に連れてくといいよ」って言つてたもん！」

フェイトは逡巡するが――

「うん、わかつた。一緒に行こう、アリシアちゃん」

～～～～

その後。

ダンジョン  
迷宮内研究所の一角で、泣きながら抱擁する親子の姿が見られたという話もあつたが、

ここは触れずにいるべきだろう。

真相は当人達のみが知るべきなのだから。

# 1～8話までの簡単な時系列

・新暦65年（P.T.事件）

時の庭園崩壊時、プレシアとアリシアを助ける。

時の庭園を修理してミッドチルダへ向かう。

何事もなくミッドチルダに到着（侵入とも言う）。

時の庭園は冒袋に仕舞う。

ティアナとティーダに遭遇。

ランスター兄妹にプレゼント（フルポーション加工品）を与える。→ティーダ生存フラグ。

ナカジマ家と遭遇。

ナカジマ家にプレゼント（フルポーション加工品）を与える。→クイント生存フラグ。  
嘱託魔導師へと勧誘される。

嘱託魔導師試験に合格。

いくつかの捜査に協力。→巨大闇組織の摘発に貢献し、伝説になる。（この辺の話を

書くかは未定）

功績を上げすぎて勧誘の嵐を受けた為、自国へ帰る。

闇の書事件には関与せず。

・新暦67年（戦闘機人事件）

クイントのみ生存。↓致命傷を負つたが、リムルがプレゼントしたイヤリング（フルボーション）が割れてなんとか生存↓ただし少量の為完全回復はせず現場は引退。

ゼスト、メガーヌは原作通り一度殺害され連れ去られる。

・新暦69年

ティーダ逃走違法魔導師追跡任務中に重傷を負うも、リムルのプレゼントしたオモチヤ（フルボーション）が割れなんとか生存↓現場からは降格。原作と同様に上司から心無いことを言われ、ティアナが傷つく。

・新暦71年（臨海空港大規模火災）

ギンガとスバル、原作通りなのは達により救出。姉妹の手には、リムルから貰つたペンダントが握られていたとかいなかつたとか。

・新暦75年9／19（聖王のゆりかご起動）

リムル 再訪

ギンガとスバルの戦いを見届けてから2人を介抱

その後、同じくティアナの奮闘を見守りつつこつそり手助け。終わつた後に姿を見

せ、ポーションやら魔法やらで回復させる。（ついでにヴァイスも）

その後ゆりかごへ向かい、現場を手助けする。

ゼストの死に目を見守る。

死んだドゥー工を諜報としてスカウト。生き返らせる。

・その後

事件解決後、ナカジマ家とランスター家に顔を出し、クイントとティーダの傷を完全に癒す。

ゼストの墓参りに行く。

拘束されているジェイル・スカリエツティと一部の戦闘機人が白髪化、発狂する事件が発生。本局捜査担当の局員が頭を悩ませる事に。

・新暦76年4／29（機動六課解散翌日）

スバルとティアナに請われ機動六課の面々と会う。噂のせいで機動六課 v sリムルで模擬戦を行うことに。各員にトラウマを植え付ける。また、フェイトにアリシアの面影を見つけ、意味深な言葉を告げて立ち去る。この時ヴィヴィオには「すつごく綺麗で強い人」という印象を与える事になつた。